

金沢大学タウン・ミーティング in 野々市

**ともに創り ともに育む**  
**住み続けたいまちづくり**

2013年1月27日

野々市市情報交流館カメラア ホール椿

---

## 開会挨拶

金沢大学学長 中村 信一

野々市市長 粟 貴章

---

**司会** ただ今より「金沢大学タウン・ミーティング in 野々市」を開催いたします。今回のテーマは「ともに創り ともに育む 住み続けたいまちづくり」としております。本日の進行は、金沢大学地域連携推進センターの國司田晴美が務めさせていただきます。

開催に当たり、主催者の代表お二方からごあいさつをいただきます。

はじめに、金沢大学の中村信一学長、よろしくお願いいたします。

**中村** 本日は多くの皆さんにお集まりいただき、誠にありがとうございます。

タウン・ミーティングは地域の皆さま方との話し合いを通じて、地域と大学がどのように関係を持ったらいいか、あるいは地域にある大学として何ができるかということを経験の皆さんとともに考えていく場です。第1回は平成14年に輪島市で行いました。今年度は12回目になります。本日の野々市とのタウン・ミーティングは、金沢大学と野々市市との共同の開催によるものです。

野々市市は2011年11月11日に町から市となった、非常に新しい市です。昨年の11月には1周年を迎えました。私は金沢市の生まれで、ずっと金沢に住んでおりますので、野々市の名前はよく知っています。縄文時代から既にある意味で集落として存在していたということは、御経塚から分かると思います。室町の時代には守護大名の富樫氏がここに館を構え、江戸時代には北国街道の宿場として栄えています。このように歴史を持つと同時に、若さが華やいでいるまちという印象を持っております。全国の統計では、地域あるいは地方が過疎化、過疎高齢化という中で、野々市市は全国で非常に人口が増えているまちであると聞いています。総務省の調査では、日本で最も住みやすいまちの2番目だということです。

先日、市長が大学へお見えになり、いろいろお話をさせていただきましたが、24時間のうち20時間は野々市市をいかにより良くしていくかを考えておられるような雰囲気を感じました。その中で、野々市市は確かに人口は増えていて、若い人が多いけれども、転出する方も多く、コミュニティをどうつくっていくかが非常に大きな問題だとお聞きしましたし、また、パンフレットにはキウイフルーツが書かれていましたが、まだ全国的に野々市イコールキウイフルーツだとはなっていない。野々市市としては何をシンボリックなものとして育てていくか、そこに大きな課題があるのだというお話も伺いました。そういう中で金沢大学がどういう形で野々市市の発展にご協力できるかということを考え、本日のタウン・ミーティングを開きました。

本日のタウン・ミーティングでは「市民が主役のまちづくり」「地域資源の創出」「住み続けたい環境づくり」という三つのサブテーマが構成されています。これは野々市市のご提案によるものです。午前中は各々のテーマについて本学の教員が基調講演を行い、午後には地域の皆さんに座長となつていただき、ディスカッションをいたします。

私は金沢東インターの近くに住んでいますが、野々市本町には、私の前の教室に勤めておられた方も住まわれていましたし、私と一緒に研究していたのは、瀬尾歯科医院の先生です。そして、県庁に

---

勤めておられました木村先生の家には魯山人が長く逗留されていたと聞いていますので、野々市市に非常に愛着を持っています。

先日、市役所の前を通りました。非常にモダンな小学校もありました。まさしく野々市市は非常に新しい、発展しているまちだという印象を強く持ちました。ぜひ本日のこのタウン・ミーティングを通じまして、金沢大学が大学として何ができるか、そして少しでも野々市市のご発展の方針、方向性を探ることができれば大変うれしく思います。以上を私のごあいさつといたします。

**司会** 次に野々市市の粟貴章市長、よろしく願いいたします。

**粟** おはようございます。雪模様で大変寒い中、多くの皆さまにご出席いただき、厚くお礼申し上げます。本市の市制施行1周年に、金沢大学との共催により、タウン・ミーティングを開催することができました。中村学長をはじめ、話題を提供していただきます金沢大学の先生方、そして今日は市民の皆さんに座長を務めていただいて会を進行するわけでもあり、いろいろな皆さんに大変ご協力をいただき開催できますことについて感謝を申し上げる次第です。

中村学長から、24時間のうち20時間仕事をしている雰囲気と言われ、少しこそばゆい感じもしておりますが、先生からこの野々市の歴史やあるいは野々市の課題ということについて少しお触れもいただきました。お話のとおり、野々市は大変古い歴史もございます。そしてその中で市民の皆さんの元気さをもってこの野々市は日々成長をしていると感じております。

そういう元気のある野々市にはいろいろな皆さんがいらっしゃいます。それから、市内には大学もございます。考えてみると、野々市にしかない資源が、まだまだ気が付いていないものも含めて、いろいろあるのではないかといつも思っています。それらを皆さんの力で発見、発掘をしながら、また、互いに連携をしながらこれからの野々市を考えていくことがまさに大事かと思えます。

これまで市としましても、市内の大学等と連携もさせていただきながら、少しずつその実績を上げてくることができたと思っています。今日のタウン・ミーティングを機に、金沢大学が持つ知的資源や技術と連携し、野々市を研究のフィールドとしてご活用いただくことにより、野々市、金沢大学双方にメリットが出てくることを期待したいと思っています。

特に、これまでまちづくりについて、市民の皆さんの参画をいただきたいと言ってまいりました。それをさらに一步前進させて、それぞれが互いに連携、協力する。野々市の総合計画では、その理念として「市民協働」を掲げています。市民の皆さんがそれぞれの立場でそれぞれのできることを持ち寄りながら、野々市の将来の夢や希望やいろいろなことを話し合う。そんなところから私は市民協働のスタートがあるのではないか思うわけです。

いずれにしても、今日のタウン・ミーティングのテーマは「ともに創り ともに育む 住み続けたいまち」です。これをこれからも皆さんとともに創り上げていきたいと思っています。今日はそのスタートの1日となりますことを心から期待したいと思っております。

終わりになりますが、タウン・ミーティング開催に当たり、金沢大学はじめ関係皆さまの多大なるご支援がありましたことに再度感謝を申し上げ、皆さまにはどうか活発なご意見を頂戴できますことを心からお願い申し上げまして、開催に当たってのごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

---

## 趣旨説明

金沢大学地域連携推進センター センター長

神谷 浩夫

---

**司会** 今回のタウン・ミーティングの趣旨について、金沢大学地域連携推進センターの神谷浩夫センター長からご説明願います。

**神谷** 金沢大学のタウン・ミーティングは、今回で 12 回目になります。昨年までほぼ毎年のようにやってきており、加賀と能登で既に 11 回やっております。

タウン・ミーティングというのは、金沢大学が県内のそれぞれの地域におじゃまし、市民の皆さまと直接お話をし、地域が持っているニーズと大学が持っている研究資源などのシーズを持ち寄り、野々市の抱えている問題を解決するために一体大学は何ができるか、野々市の協働のまちづくりを進めるときに大学は一体どういうことができるのかを、ひざをつきあわせて考えていこうというものです。

野々市市は 2011 年に市制が施行され、人口が増えている、全国では非常に珍しい都市です。したがって、ほかの都市とは違う問題を抱えていることとなります。協働のまちづくりということや、人口が増えている反面、流動性が高いということを私も準備の段階でいろいろと学びました。野々市らしさを強めていくために、金沢大学も今日は市民の皆さんと一緒に、どのように個性、アイデンティティを強めていくかということを考え、明日の野々市を育てていくためにお役に立ちたいと考えております。

この後、金沢大学の 3 人の教員から話題の提供があります。安嶋助教から「市民が主役のまちづくり」、大友教授から「地域資源の創出」、佐川教授から「住み続けたい環境づくり」というテーマで話していただきます。これに関しても打ち合わせの段階で野々市の市役所の方にお話を聞いて、それにふさわしい先生としてこの 3 人の先生方をお願いすることにしました。

午後にはこの三つの課題に沿って分科会を予定しております。そこでは市民の皆さんと大学の教員と一緒に、地域の課題を議論していきたいと思っています。安嶋先生の「市民が主役のまちづくり」のところでは、野々市の市民がもっと誇りを持ってもらうための方法、大友先生のところでは、野々市の個性をどういうふう引き出すか、そのための道筋、佐川先生のところでは、子どもも大人も高齢者もみんなが健康で暮らせるような野々市にしていくための方法に関して議論していただこうと考えています。皆さま方にはぜひこの三つの分科会のうちのどれか、あるいは全部回っていただいても結構ですけれども、金沢大学の教員と一緒に大いに議論していただきたいと思っています。

その後、3 人の座長から分科会の報告をしていただき、最後に、今回のタウン・ミーティングの準備にも奔走していただいた地域連携推進センターの浅野副センター長にまとめをしていただき、皆さま方と全体の討論をして締めくくりたいと思っています。

このタウン・ミーティングの開催に当たり、かなり前から準備を進めていました。最初は今年の 12 月に計画していたのですが、選挙があったので、今日のような寒い時期になってしまいました。準備の段階では大学と市役所の間で何回も行ったり来たりして進めました。それから、準備の段階で、市

---

役所の方に聞くと、金沢大学の教員もいろいろな形で、例えば野々市の委員会などの活動にも加わっている。あるいは、教職員も学生も、野々市の住民がたくさんおりますので、野々市がどういったことを抱えているかについていろいろ議論して、このような三つのテーマで開催することに落ち着きました。

これまで、金沢大学の教員あるいは学生は野々市と非常に深い関係を持っておりますので、今日はこの議論を通じてさらに野々市市と金沢大学との連携を深めるような集まりにしていきたいと考えています。

野々市の特徴は、非常に歴史はある一方、人口が急増していて非常に若いまちであるとも言えると思います。お聞きしたところ、市の平均年齢は非常に若いそうです。大学生がたくさんいたり、新しい住宅がどんどん建ったりしているからです。若いということは将来性が非常にあると思いますが、うまくかじ取りをしないと心配な面もあると思います。

余談ですが、私はこちらに来て、野々市の市花のエピソード、「椿十徳」という話をお聞きしました。椿の持っている「十徳」のうち、第一は「老衰しない」という話だそうです。椿は冬に咲く花ですが、強い寒さの中で若々しい花をつける。今、野々市は人口が若い部分もある。一方では北国街道の宿場町という古い歴史も持っている。そういう中で新しいまちをつくっていくために着実な息吹を育てているということを知っています。

打ち合わせのときにも、例えば「ののいち里まち倶楽部」の方から、市民によるまち歩きの活動をお聞きしました。そのほかたくさんの方が活動が市民によって行われていることもお聞きしました。それから、ぶった農産の佛田さんからは、野々市の産業戦略会議などで検討を重ねられているということも聞きました。そういった方々、あるいは一般の市民の方を交えて、これからの野々市について今日は検討させていただきたいと思います。

タウン・ミーティングは今日ですが、午前・午後と十分に時間がありますので、皆さんと大学が大いに語り合って成果を上げていきたいと思います。

今日一日、よろしくお願ひしたいと思います。

**司会** これより、金沢大学の3名の教員から、本日の三つのテーマについて話題提供をしたいと思ひます。

野々市市は一昨年(2019年)の11月11日に町から市へと移行して、最初の10年間の第一次総合計画を策定しました。今回の三つのテーマは将来の都市像である「人の輪で 椿十徳 生きる町」を実現するための原動力として掲げられた三つの重点プロジェクトを参考にして設定されました。したがって、野々市市が目指す大きな柱とも言えます。これら三つのテーマについて、金沢大学の教員がお1人30分でそれぞれの専門分野の研究のご経験を通して、これからのまちづくりの参考事例などをご紹介します。この話題提供は午後の分科会につながるものですし、今後の野々市市をよりよくするために役立つことにもつながると思います。ご自身が出ようと思っらっしゃる分科会を想定しつうお聞きいただき、大いに参考になさってください。

最初に、テーマ1「市民が主役のまちづくり～地域に誇りと愛着を～」について、金沢大学人間社会研究域経済学経営学系の安嶋是晴助教から、話題提供をお願いします。

## 「市民が主役のまちづくり～地域に誇りと愛着を～」

金沢大学人間社会研究域経済学経営学系 助教

安嶋 是晴 氏

---

私は実は野々市の市民です。小学校、中学校は野々市小学校、途中から御園小学校に行き、その後野々市中学校を出ました。野々市で育った人間です。その後、仕事で県外に出たりもしましたが、7年前に金沢大学に就職し、戻ってまいりました。

私の資料の表紙は、本町在住の吉岡さんという方が2000年に本町通り、北国街道沿いの風景を絵に描いた絵巻「二千年家並之図」の一部分です。この絵の中に私の家があります。野々市神社からまっすぐ工大の方に向かった交差点の、さっちもさんというジャズバーの向かいに家があります。ちょうどいい絵があると思って表紙に付けさせていただきました。少々モダンな家を造ってしまいましたので少し後悔しているところでもあるのですが、もし建て替えることがあれば完全な町家にしたいと思います。

今日は「市民が主役のまちづくり～地域に誇りと愛着を～」というお題で話をと言われたのですが、粟市長からもお話がありましたが、野々市市は協働のまちづくりを重点的に進めようとお考えですので、今回は協働についての説明を行い、少しアイデア段階のものですが、野々市のまちづくりについての私案をご提案したいと思います。

### 1. 参加から協働へ

#### 1-1. 「市民参加」と「市民協働」

これまでは市民が市の行政にかかわるという「市民参加」という言葉がよく使われてきていました。これは1970年ごろからよく使われるようになったのですが、歴史的には日本はお上意識が強く、市民の行政依存が大変高く、市民の活動領域と行政の活動領域が明確に区分されていたと思います。

それが戦後、さらに行政の領域が広がってきました。特に象徴的なことは、1969年に松戸市でマツモトキヨシの社長が市長になられたとき、「すぐやる課」という課を作ったのです。それは先駆的な取り組みだということで、その課をつくったところが400カ所ぐらいあったと言われています。現在はそういった取り組みは時代に合わなくなっていて、10ぐらいしかありません。このように、行政の領域がどんどん広がってくる一方で、市の政策に市民がかかわらなければいけないという意欲が高まってきて市民参加という動きが出てきたと私は考えています。

1970年ごろの自治体の方のプランには、大概「参加」という言葉が入っていますが、1980年、90年になると「参画」という、計画段階からかかわるという言葉に変わり、近年は「協働」という言葉に変わってきています。市民が市に企画、実施、評価の過程から参加することが、今は市民と市が対等の立場でお互いの特性を生かし合い、「協働」を補完し合う関係に変わってきたということです。

「協働」という言葉は、1990年代後半ぐらいに使われ始めました。このころ、NPO法が制定されました。阪神淡路大震災が1995年に起こり、これまであまり認識されていなかったまちづくりやボラン

---

ティア団体の活動が大変評価され、その活動に法人格を付与しようという動きが起こり、1998年にNPO法が施行されたわけです。そこに至って初めて行政は正式なパートナーを認識するに至ったと言われています。

## 1-2. 今なぜ市民協働なのか

今、「協働」と言われているのは、およそ四つの変化があったからだと思います。一つ目は社会の変化です。野々市は幸い、人口の増加率は日本でトップクラスですが、日本全体では少子高齢化の人口減少、そして市民ニーズが大変多様化し、行政サービスの提供がなかなか難しい状況になっています。

二つ目は、それに関連する形で、行政の変化です。行政は人口の減少に伴い、財政が悪化しています。また、地方分権化で権限が地方に下りてきましたが、これは裏を返せば、権限を実行するだけの能力と知恵がなければ宝の持ちぐされになるという危機もはらんでいます。また新しい公共という認識が進んでいます。これは鳩山政権のときに施策の柱に打ち立てられたこともあります。民間が行うには採算が合わないような領域を新しい公共と位置付けて積極的に事業展開ができるような環境をつくっていかねばいけないという動きが出てきたわけです。

三つ目は市民の変化です。「モノからココロへ」「社会貢献志向」「震災後の『絆』」ということで、物質的な豊かさ、金銭的なメリットよりも、心の豊かさや、家族・兄弟・地域愛など絆を重視しようという動きになってきています。また、これまでボランティアに興味がなかった人たちも、社会貢献志向が強くなり、このような活動にかかわりたいと希望する人たちも増えてきました。

四つ目は地域の変化です。団塊世代の人たちがどんどん退職して地域に戻ってきています。この人たちは大変優秀で、知恵もあり、体も大変健康ですが、今何をすべきか分からず、地域の中で模索しています。その市民のパワーとアイデアを行政側に提供していく。行政側はそういう人たちに情報や資金や場を提供していく。この対等な関係の中で進めていくことが協働社会の形ではないかと言われています。

四つの変化の中で、人口の話をしました。野々市は増加傾向にあります。10年、20年、50年のスパンで見ると明らかに人口は減り、石川県、金沢、野々市もその人口減少の波に確実に飲み込まれるでしょう。2010年の統計で見ると、人口1億2800万人で、出生率は少し改善されて1.39にはなっていますが、このまま進んでいけば、50年後の2060年には約3割が減ってしまいます。すると、当然財源が減り、マンパワーが落ちてきますから、地域の人たちが活躍することが期待されるわけです。

また、市民の変化というところで、心の豊かさ、物の豊かさということについて、少し統計的なデータを示したいと思います。総務省は戦後、物の豊かさや心の豊かさについての調査を継続的に行っていますが、物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりある生活に重きを置きたいという人が昭和51年に上回り、現在は心の豊かさを重視する人が3分の2になりました。心の豊かさというのは、自然環境や住みよさ、人のつながりなどを重視する、大切な気持ちだと思います。そうした取り組みを自分たちでつくっていくという動きが市民役のまちづくりに大変重要なインセンティブになると思います。

---

### 1-3. 協働の領域

この箱が一つの事業だとすると、片方を市民の活動の領域、もう片方を行政の活動の領域とすると、A領域は市民だけが主体的に活動を担います。B領域は、8割ぐらい市民が中心となってやり、2割ぐらい行政が支援するという領域です。Cという領域は、行政と市民が対等の責任で協働する領域です。Dという領域は、8割ぐらい行政が主となり、2割ぐらい市民が支援する領域です。Eは行政が主体的に活動を行う領域です。

Aの領域は、例えば私は北国街道沿いに家がありますが、自分の家の前を掃除する。これは行政の活動にはなりません。個人的な活動になります。Bの領域は、私が北国街道全部を掃除しようという動きをし、そのときにゴミ袋などを行政側が支援した場合です。Cの領域は、北国街道をもっと魅力的なまちにするために共催でイベントをやる、あるいは実行委員会をつくってシンポジウムをやるような場合です。Dの領域は、例えばごみの収集です。収集車は行政が走らせますが、ゴミステーションの当番は市民が主体的に行う。Eの領域は、収集されたごみの統計データを出すような場合です。このように、BとCとDは広義の意味での協働の領域と言われます。Cは狭義の意味の協働の領域になってくると思います (#8)。

## 2. まちづくりの条件

今後、市民が主役のまちづくりを進める上でどのようなプロセスがあるのかですが、まず市民が主役でまちづくりを行うということは、大概是1人の人の発意から始まります。これは1人の人 (Non-profit person) がいて、NPPと呼びます。この人たちは自分の活動が、自分の思いがほかの人の周りの人に共感を得るように説明をすることで、一つのグループが出来上がります。そのグループがさらに賛同を呼べば組織になってきます (Non-profit group, NPG)。組織になれば一定の規約を設け、代表者を決め、会計担当者を置き、組織としての機能を持つ必要が出てきます (Non-profit organization, NPO)。協働のパートナーとしての対等な組織ということであれば、少なくともこのNPOという状況まで成長する必要があると思います。そして、この活動がある程度社会的に認知されて、公益性のある団体・活動、社会的な存在になり得ると認められるならば、行政機関の認証、認可を得、Non-profitなcompany、社会福祉法人や一般社団等に進化してきます (NPC)。

これを水滴の成長にたとえると、1人の発意=水滴 (NPP) が、少しずつ集まって水たまり (NPG) になってくる。この水たまり日光に当たるとすぐに干上がってしまうかもしれない。でもその水の流れがどんどん多くなってくれば、川のように一定方向、一定流量になり、流れができ (NPO)、それがさらに大きくなれば海、公益性のある社会的存在になれば、海のように持続的、安定的な存在になり得ます (NPC)。

もう少し具体的な話をすると、住民が個人的な活動を行っていたのが少しずつ活動の仲間ができてくると団体・クラブ等になってきます。さらにこれを公益性のある活動に高めていく。共益団体が自分たちの好きなことをやっているだけであれば、市民の活動には位置付けにくい。その活動をより公共性のある活動、公益性のある活動に高めていくことが、今課題として問われています。

ここには課題があります。潜在的な人材をどのように見つけていけばいいのか、どのように育てていけばいいのか、趣味的な活動をどのように公共的な展開に高めていくのか、これらの活動にどう市民を巻き込んでいくかという課題です。私はトロンボーンという楽器を吹きます。トロンボーンを吹



---

く仲間を集め、サークル活動をしています。一緒に吹くだけの仲間であれば単なるサークル活動ですが、少し公共的なこともやりたいということで、老人ホームや保育園の慰問というような活動もしています。また、県内全域の中学校、高校のトロンボーンを吹く人たちの技術を高められたらいいということで、プロを呼んでレッスン会もしています。このように、少し見方を変えれば人のためになるような公益性の活動に転嫁できるのです。そういうヒントのようなものがあれば、もっと市民の活動は変わってくると思います。

変えるために何が必要なのか。私は金沢市で協働を進める市民会議のアドバイザーを7年間やってきて、創造的な場をつくるということと、仕組みをつくるということが大きいと思いました。金沢の例を挙げながら、協働を進める方法を述べたいと思います。

## 2-1. 創造的な場づくり

最初に行ったのは市民会議です。このタウン・ミーティングもある意味では市民会議の場ですが、市民会議とは、市民がまちづくりを学び、自由闊達に意見を出せる会議です。その場は年齢、職業、性別は問わない。定期的で開催する。基本的に自主運営。まちの将来を語り合う場。さまざまなアイデアを出す場。アイデアを具体化する場だと思います。まずはまちのビジョンを共有することを優先的に始めていくことが求められていると思います。

市民会議は、来年度以降、野々市は公募して実施すると聞いていますので、ぜひ皆さんと一緒に議論できればいいと思っています。

二つ目は協働センターです。今、金沢市は学生まちづくり交流館をラブロの裏につくっています。そこは、学生のまちづくり支援という名目にはなっていますが、市民の活動も積極的に支援をする場になっています。主な役割の一つ目は、市民の活動に関するあらゆる情報が収集・発信されていることです。どういう人がどういう活動をしているか、自分がこういう活動をしたいけれども、似たような活動をやっている人、あるいはやりたい活動がどういうところにあるかという情報がきちんと整理して置いてあったり、積極的に発信される場がなくてはならないと思います。二つ目は、その場に状況が分かる、専門的な知識を持ったコーディネーターが常駐していることです。三つ目は会議や打ち合わせができるスペースがあることです。四つ目は協働を担う市民のための定期的な学習プログラムが提供されていることです。この四つが創造的な場づくりのためには必要不可欠であって、金沢ではこれが今年度実現しました。最も大事なことは、人と情報の交流する場だということです。

## 2-2. 仕組みづくり

金沢市の場合は、市民からまちづくりの事業企画を提案していただいています。その事業企画は書類審査の後、公開プレゼンテーションを経て、受託に至るわけですが、その企画、運営はすべて協働を進める市民会議という、市民の団体で担われています。助成する金額については、市の方で300万円程度の予算を10件ぐらいにお分けする形になっています。

その審査の過程で必ず担当課がかかわります。その担当課は、審査する前に、審査委員研修を受講していただいたり、公開プレゼンテーションにも参加していただきます。受託団体が決定後は、関係団体、関係担当課との連絡調整を行い、受託事業が開始した後は進捗状況を市民ブレイン連携庁内プロジェクト会議で監督していくという流れになっています。

---

さらに、市民を育てるという観点でこの事業は実施されていますので、書類の審査で落ちたところは再審査をして、どうしても受理できないものは落選にし、可能性があるものについては再チャレンジセミナーということで敗者復活を行います。それで再申請を行って二次審査に臨んでいただくような形を取っています。

さらに市民会議のメンバーの中で、審査のスキルを高めていくために、審査員研修を行っています。公開プレゼンテーションは大半は市民会議のメンバーです。市民の活動を市民で審査をするという流れになっています。このような事業のいいところは、単に予算を付けるだけではなく、団体のスキルを上げていったり、行政側もさまざまな地域活動が行われていることを認識する場でもあり、大変重要だと思います。

### 3. 事業企画（私案）

私は「高級野菜のまち『野々市』を目指して」を考えてみました。これは、野菜に関する野々市の資源は大変豊富であると思うからです。私は今野々市に7年間住んで、自分が小学校、中学校時代にはあまり認識していなかったのですが、ヤーコンやキウイ（青果）、特徴ある農業をやっているぶった農産さんや林農産さん、あるいは特徴ある青果店が多々あります。また食品販売加工ということで、新庄にはむらはたフルーツがあります。また、株式会社セイツという、これは川北の会社になるのですが、100人ぐらいの結構大きい食品加工の会社です。この会社の社長さんが野々市に在住です。あるいはおいしいフレンチ、イタリアンの料理が食べられるところがたくさんあります。また、関連機関として、県立大学は農業科があります。専門家ということでは、私の近所には野菜ソムリエがいたり、フードコーディネーターがいたり、チーズシュバリエがいたり、調理師、栄養士がいます。そして、祭事として野菜神輿があります。これだけ野菜に関するシーンがそろっているのであれば、これを生かしたまちづくりをやれば良いと考えました。

そこで、中心にのいち野菜研究会というものを設け、青果店からは買う知恵、レストランは食べる知恵、加工業者は作る知恵、大学・研究機関からは開発する知恵、食の専門家からは食の知恵、本町2丁目の野菜神輿からは遊ぶ知恵、農業者からは育てる知恵。こういったものを総合して、行政と連携しながら、市民に参加していただきながら事業展開をする。それは学習会、栽培実習、祭り参加、定期市などが可能ではないか。これがこの後の大友先生の話の地域ブランドの向上の話や、佐川先生が話す健康づくりという話にもつながるのではないかとということで、たたき台を提示しました。

### 4. まとめ

まず、多くの市民がこれからのビジョン、話し合いを共有していくことが大切です。まだ野々市がどういうビジョンで進めていくかということが全く定まっていません。総合計画はできましたが、市民に浸透させる、あるいは市民に考えてもらう機会はこれからだと思っています。そういったものをもっと回数と時間をかけてやるべきだと思います。

二つ目に、協働のまちづくりを進めるには、創造的な場づくりと仕組みづくりが重要です。これは協働センターをつくることや、市民会議をつくること、あるいは仕組みづくりとして市民公募型事業を取り入れることなどが重要になると思います。

三つ目は、協働のまちづくりは自立的な市民によって主体的な活動を行っていくことが大切です。

---

午後からは、できればみんなでビジョンを共有したいと思っています。今後、野々市が誇りと愛着を持てる市になっていくためにはどうしたらいいのか。どんなまちがいいのかを少し話をしていきたいと思います。時間があれば、その人を育てる仕組みということと、既存の活動を考えるということで、そのビジョンを実現するにはどのような人が必要で、どのような人を育てたいのかを考えていく。既存の活動を考えるということでは、今後野々市ではさまざまなまちづくり活動が行われていますので、その活動をさらに良くしていくためには何が必要なのか。そういったことについての意見なども交換できればいいと思っています。

**司会** ありがとうございました。続いて、テーマ2に移ります。テーマ2は「地域資源の創出—野々市の個性を引き出すには—」です。金沢大学人間社会研究域法学系の太友信秀教授から話題提供をお願いしたいと思います。

## 「地域資源の創出—野々市市の個性を引き出すには—」

金沢大学人間社会研究域法学系 教授

大友 信秀 氏

---

おはようございます。話を聞いていましたら、安嶋先生と考えていることが似ていて、分科会と一緒にやった方が面白いかなと思うぐらいでした。今日は個性をどうしたら引き出せるのかという話になるのですが、その場合、引き出してどうするのかということをもまず考えていただく必要があります。例えば民間企業の場合であれば、個性を引き出して、そこから新しい商品を開発したり、新しい顧客を開拓することになります。野々市市の場合は、市としては非常に新しい自治体であるということで、これから住民の方の連帯意識も持っていかなければいけない。ただし、そうやって連帯意識を持っていただいてどういう市にするのか、市としてどんなことに挑戦していくのかというところが具体的にない、その活動も明確に見えてこないし、皆さんもなかなか参加しづらい。今日は、普段、私がやっているブランディングというブランドの作り方の考え方に基づいてお話していきたいと思っています。

私は法学系に所属している教員で、本来の専門は特許法、著作権法という知的財産法という法律の分野です。しかし、いろいろとご縁があり、コンサルタントとしての仕事を6~7年しております。もともとは能登の野菜生産者の方々が商標を取りたいというお話を持ってきてくださったところからお付き合いが始まりました。商標を取るだけでは売り上げにつながりません、どうすれば生産量を増やすことができるか、単価を上げることができるか、戦略をどう取るかということで、ブランディング・マーケティングを一緒に考えていきました。

6~7年前はそういうブームになりかけてはいましたが、農家の方がブランディングやマーケティングをすることはめったにないことでしたので、一緒に勉強していく中で、その分野のニッチな経営指導ができる人という変なうわさが立ちまして、引きずり込まれた結果、現在では石川県の「耕稼塾」という、農家の方の経営指導をするコースの講師を務めることになりました。あるいは石川県の「企業ドック」という中小企業の方が経営指導を県のお金で一定期間受けられる制度の指定コンサルにもなりました。また、北陸農政局の6次産業化の委員会の委員、これは農業を1次産業で終わらせずに、2次、3次までつなげていくことを検討していますが、そういうところのお仕事もさせていただいています。また、加賀市も市になることでいろいろな地域を合併して新しいイメージをつくっていきたいということで動いていて、加賀市のブランド協議会のブランド・アドバイザーもさせていただいています。こちらは若干役得があり、先週、地元で食べられる野生のマガモの試食会、食談会がありました。道場六三郎さんも一緒に、非常においしいマガモを頂いてまいりました。その分、しっかり考えなければいけないということで、これからどうして恩返しをしようかと考えております。

今日はそちらの方面の話をさせていただきます。

---

## 1. ブランディングの三つの要素

まず、個性を引き出したらどうなるのか、どうしたいのかということを考えていただきたいのです。それによって野々市の魅力が上がるのか、定住人口の増加につながるのか、あるいは新しい自治体としてのコミュニティへの帰属意識が高まるのか。そういったことに関係するのかというようなことを出発点に置いていただきたいと思います。

今日はブランディングという手法で考えていきたいと思っています。ブランディングは三つの要素に分かれます。まずは自分の個性を見つけて磨き上げる（ブランド・アイデンティティ）。それから、そういった個性を最高値で評価をする市場を見つけて、市場に合わせた個性の表現方法を選択する（ブランド・イメージ）。そして、このブランド・アイデンティティとブランド・イメージをつなげていく、市場と個性の最適な関係を創造する（ブランド・コミュニケーション）。この三つの要素をご理解いただければ、どう個性をブランドにし、そのブランドを理解する方々にどうアピールしていくかがご理解いただけるとと思っています。

### 1-1. ブランド・アイデンティティ

ブランド・アイデンティティは、強みをどうやって見つけていくかという部分になります。野々市の個性をどうやって見つけるのか。自分のことは、自分ではなかなか分からないものです。私も能登半島や加賀の方にお伺いして、地元のNPOや農家の方と一緒に新規事業の開拓を前提に強みを探そうとするのですが、非常に特徴的なものをお持ちの方々が自分で気付いていらっしやらないことがよくあります。そういった場合には外部や、自分とは全く異なる方を招き入れて一緒に考えてみるのが非常に重要です。例えば最近はやりのイノベーション、社会を変えようとか新しい動きをつくろうというときに、「よそ者、若者、ばか者」と言われますが、普段あまりいない方々を巻き込むと新しい視点がもらえます。

「よそ者」ということで、野々市に從來からいらっしやった方ではない方をどんどん入れていく。あるいは、金沢市から見たときに野々市はどうなのですかというコミュニケーションも取れるかもしれません。それから「若者」ということで言いますと、ここには県立大学と金沢工業大学がありますので、若者には不自由していないと思います。そういった方々をどんどん使う。あるいは大学だけでなく、高校生、中学生、小学生に落としていき、子どもたちに地元のことを勉強していただく中で発見していただく。子どもの方が新鮮な視点を持っています。いつの間にかくだらない大人になりかけていまして、特に大学という権威のかたまりの所にいると、だんだんそうなります。そういう自分とのせめぎ合いで今あがいております。こういった法学以外の専門で呼びいただいたときにできるだけ断らないのも、地元の方とコミュニケーションすることで、いかに自分がものを知らなかったか、大学などにいたら駄目だということに気付かせていただくからです。そういったことも使っていくのがブランド・アイデンティティを見つけていくコツです。また分科会で補足させていただきたいと思います。

小学校での地域学習というのは、そういう点では非常に効果的ではないかと考えています。強みを見つける作業の中で、小学生が地域に愛着を持つという副次的な効果も導き出せると思います。その小学生を中心に、小学生と先生、小学生と親というように、地域のネットワークを相互に強められるのではないかと。こういった強みがまた野々市の個性につながっていくのではないかと考えています。

---

この辺りも、具体的なことは分科会でぜひ皆さま方のご意見もいただきながら、もっと深めていきたいと思っています。

## 1-2. ブランド・イメージ

こういう作業の中で見つけてつくり上げていく個性を誰に伝えたいのか、どんな人に野々市の個性を伝えて評価してもらいたいか、ブランディングの上では非常に重要になってきます。現在お住まいの市民の方なのか、将来、野々市に来ていただきたい方、将来の市民になってくださる方なのか、あるいは観光を含めたショッピング、観光等の訪問者に対してなのか、あるいは企業等の事業参加者に向けてなのかによって、強みの見せ方が変わってきます。そんなところも考えていきたいと思っています。

## 1-3. ブランド・コミュニケーション

自分の強みをどういった人たちに伝えていくのかを考えていくときに、その伝え方をどう選択してあげばいいのか、どんな方法を取ればどんな効果が得られるのか、どんな活動、どんな方法が誰にどのように作用するのかということを考えていくのがブランド・コミュニケーションの部分になります。

市は年度予算主義を取っていますが、いろいろなことは1年ではなかなかものにはなりません。未来永劫続いていく作業をどれぐらいの期間で考えるのか、その期間内にどれぐらいの効果を期待するのかというようなこともここで考えていかなければいけないと思っています。さらには、そういった短期、中期、長期の計画を常に見据えながら、向かおうとしている方向が正しいのか、そういうコミュニケーションの方法が正しいのか、自分たちが思っている強みは本当に強みなのか、自分たちが予想しているようなイメージでとらえていただいているのかなどを総合的に考えるのがブランド・コミュニケーションです。

## 2. 野々市の個性

自分自身が金沢に住んでいて、野々市には買い物で来る程度、友人は何人かいますが、金沢との差異は住んでみないとなかなか分かりません。そういった視点から言うと、率直に申し上げて金沢のベッドタウン以上の何があるのかということについては実はよく分かっていない。そういった方が多いでしょうから、外部の方に発信する場合には、それ以上のものがあるのであれば、それを明確に伝えていく努力をしていかなければいけないと思っています。

ほかのイメージでは、自治体の規模が非常にコンパクトだということです。金沢に比べると10分の1強の人口です。そういった人口であるということは、市民の意思が届きやすいのか。議会や市長がいろいろな政策を実行していくときに、機動的に実現できる余地がほかの市よりはあるのではないかと期待してしまいます。あるいは、大学が多いということもあります。平均の市民の年齢が38歳ぐらいだったでしょうか。私の年齢でも平均年齢を押し上げてしまうというのが、すごい市だと思っています。大学にいとどどちらかと言うと平均年齢、教授陣では下げている方だという自負があったのですが、ここに来ると年寄りの方に入る。それほど若いまちです。金沢工業大学や県立大学を活用して、新しいことに挑戦できる余地が非常にあります。活気があるまちとして、いろいろブランディングもやっているとはいえないかと思っています。

---

これから、そういったブランド・コミュニケーションの活動等を通じて野々市の個性を引き出すときに、どうしても必要になってくるものがあります。それは若いリーダーの方です。市長もお若いのですが、市長よりさらに若いリーダーがどんどん出てきて、各分野を引っ張っていくことがキーポイントになると思っています。佛田さんには6~7年前に初めてお会いしたときは若いリーダーとお呼びできたのですが。しかし、佛田さんも恐らくご本人はいまだに若いと思っていますので、そういった方を中心に農業関係、あるいは農業の加工業を含めた産業の創出にかなり期待できるとしています。

また新しいアイデアが出てこないとどんどん縮小していくのです。市が発展するためには、拡大再生産が不可欠なのですが、一つ規制を始めてしまいますと、どんどんその中で新しいものが生まれなくなってきました。逆に新しいものが生まれるような余地をつくっておけば、どんどん再生産されて拡大していくのです。そういったことに行政がどういうふうに関われるのか、あるいは市民の皆さんがどういうふうに関われるのかというようなことを考えていただきたいと思っています。

そういうことをするために、もちろんリーダーを探し出す、あるいは育てることが不可欠になります。そういう方々を育てていくためにも、異なる価値観を認め合う素地がないといけないと思います。また、失敗を許す土壌が必要になってきます。どうしても行政や大学という組織になりますと、異なる価値観を許さない、面白いことを言っていると「変わった人」とか、「何か危なっかしいからリスクがあるので、役職には付けられないな」とか、「失敗をするなどということは、とてもじゃないけど許せない」などということが出ます。しかし、そういうことをやっていると、新しい考え方が出ません。創造的な場ができません。人が育っていきません。

先ほど、金沢のまちに学生が集まる場ができたという話がありましたが、その場所は学生が使う場所なのですが、例えば「お酒を飲んではいけない」という厳しい決まりがあります。お酒を飲むと何らかの問題があるということで、そういう決まりになっている。市のものだからしょうがないのかなとか、考えてしまいます。この「市のものだからしょうがないよね。お酒は禁止だよね」。はっきり言わせていただければ、もうこの時点で新しい考えは生まれません。お酒を禁止することのメリットと、禁止されることによるデメリットを考えたときに、まちの交流を図る、若い人が来て新しい意見を出してもらおうというときに、それがどれだけのデメリットなのかに気が付かない金沢市が非常に悲しい。それが当たり前だと思って、それに協力している教員も多い。これも非常に悲しい。できれば野々市の皆さま方には、そういうふうになっていただきたいくない。もっと面白いことをどんどんやって、市長にぜひ責任を取ってもらおうように。「最後はうちの市長が責任取るから」というような自治体にしていただければ、非常に未来のある、面白い自治体になっていくと思います。そうなれば私はこちらに住民票を移して住みたいとも思っておりますので、ぜひとも、この活動を通じて、そのような方向に行けるように分科会でも皆さんと交流させていただきたいと思っております。

追加の内容は分科会の方でしていきたいので、この辺で終わらせていただきたいと思っています。

**司会** 最後のテーマに移ります。テーマ3は「住み続けたい環境づくり～生涯にわたる健康を～」です。金沢大学人間社会研究域人間科学系の佐川哲也教授から話題提供をお願いしたいと思います。

## 「住み続けたい環境づくり～生涯にわたる健康を～」

金沢大学人間社会研究域人間科学系 教授

佐川 哲也 氏

---

じょんからの里マラソンが先月実施され、私も参加させていただきました。残念ながら普段トレーニングをしておりませんでしたので、走ることはできませんでしたが、子どもたちが元気よく走り出していく姿は大変素晴らしいと思いました。そして、このマラソン大会が31回目を迎えたことに大変驚きを感じました。今は大変なマラソンブームです。金沢市もフルマラソンをするということで、これにまちづくりを重ね合わせているわけですが、31年前にマラソンを始めたことは大変素晴らしいことだと感じています。マラソン大会は今、全国で1000以上もあるそうです。毎日のようにそこら中でマラソンが行われています。規模は数万人を誇るマラソンから、小さなものまでだと思いますが、地元の子どもの記憶に残るマラソン大会を持っているまちは大変素晴らしいのではないかと思います。

皆さんの中で、「走りました」という方はいらっしゃいますか。市長と、もう一人ですね。では「応援した」という方はどのくらいいらっしゃいますか。20人ぐらいですね。では、このマラソンについて、お友達や家族で「話をした」という方はどのくらいいらっしゃいますか。30人ぐらいになりましたね。

スポーツの話題というと、松井選手やイチロー選手の話など、テレビの中で登場してくる人たちの話題が多いのですが、それでいいのだろうかとは私は思っています。自分のまちの、あるいは私自身の運動やスポーツの話が広がっていくことが、その土地に暮らす人間にとってとても大事なことだと感じています。このマラソンがもっと広がっていくことを希望しているわけです。金沢はきっと大勢の人が全国から集まってくるのかもしれませんが、野々市市のじょんからの里マラソンは歴史のあるそういうマラソンだと市民の人が本当に思えるものだと感じています。

### 1. 健康で住み続けるための条件

正直に言いますと、私は野々市のことをほとんど知りませんでした。そして、市役所の方にいろいろな情報をもたらしたりしながら勉強させていただいた結果、「このまち、よくできているな」と感じました。一つは「総合計画」です。もう一つが市のホームページです。必要な情報があふれていて、私自身も大変勉強になりました。ここで住むのもいいかなと、本当に思いました。

住み続けるための条件を考えたときに、住みたいまちのプランがそのまちにあるかどうか、そして、その中に、住み続ける、住み続けたい、住み続けている人の姿が描かれているかどうかが大変重要だと感じたわけです。

「野々市市第一次総合計画」のダイジェスト版の表紙は、大変美しい青空です。これを読んだことがあるという方はどのくらいいらっしゃいますか。半分以上の方の手が挙がりましたね。分かりやすく、本当に素晴らしかったです。その内容を借りながら、この中に何が込められていたのかを振り返



---

ってみたいと思います。

## 2. 「野々市市第一次総合計画」の特徴

特徴の1番目は、10年後に野々市市がどのようになっているかが明確に書かれていることです。ここでいいではなく、ここがいい。恐らく住み心地一番のまちというのは、日本の中で1番を目指す。もしかすると、世界の中でという思いも込められているのかもしれませんが。その自負がないまちであれば、そこに住みよさを求めることは期待できないかもしれないと思いました。

市民の皆さんにとっては住み続けたい、市外の人からは住んでみたいと思うようなまちという思いがたくさん込められていると感じました。

特徴の2番目は、市民協働のまちづくりの方針が明示され、これが中心になっていることです。市民がまちづくりに参加することについて、自分たちのまちは自分たちでつくるのだということが明言されています。そして市民と公共サービスを担う団体が、それぞれ責任ある適切な役割分担をしようと市民に対して問い掛けている。市が市民の皆さまにボールを投げているのだと感じました。そのボールを市民の皆さんがどのように投げ返してくれるか。そういうことを狙って、市はこうした優れたプログラムを総合計画を作られたのだと思います。市民の皆さんがボールを投げ返せるか、投げ返せる市民を市が育てられるか。そのことが住み続けたい環境づくりにとって大切だと思いながら今日はお話をします。

## 3. 市民協働の役割分担

私の専門はスポーツ社会学ですので、その内容に触れながら紹介させていただきます。

総合計画の中には、自助、共助、公助について、自分のことは自分であるのが「自助」、市民と市が協働してやるものを「共助」、市が専門にやるものを「公助」と説明されています。そして、自助、共助、公助の範囲について図が描かれています。これは、公共サービスの部分はこれだけで、市民の皆さんが活躍できる分野はこんなにあるのです、だから市民の皆さん、私たちと一緒にまちづくりをしましょう、市民の皆さん、ボールを投げ返してくださいというメッセージだと感じました。

そして、8項目にわたる政策があり、2番目の健康にかかわる分野では、「生涯健康、心かよう福祉のまち」という項目が立てられていました。その中では、「健康づくりの推進」ということで、「こころとからだの健康づくり」「良質な地域医療の提供」という内容が含まれていました。また、5番目は「みんながキャンパスライフを楽しむまち」ということで5項目立てられていて、特に「生涯学習社会の充実」というところでは、社会教育や生涯スポーツの話題が登場しています。

## 4. 野々市市のスポーツ活動

野々市市のスポーツ関係団体はたくさんあります。いずれもスポーツを愛好する団体の皆さんが主体的な運営によって、市の体育施設や学校体育施設を利用して活動されています。「スポーツガイドのいち2012」には、スポーツ施設の場所が一覧になっていて、すぐにでも使える良い情報になっています。

市から野々市市の運動スポーツ施設について、活用実績の統計データをいただきました。平成22年に市民体育館を6万4000人ほどの方が利用されており、29万1553人がスポーツをしたという記録

---

が残っています。数字に載らないものは結構あるので、実際にはもっと多くの方がこの施設を利用されていると思います。これを1日平均すると約800人です。皆さん、この数は多いと思いますか、少ないと思いますか。

また、五つの小学校と二つの中学校で運動場と体育館が開放されています。ここで大人が運動、スポーツをしています。平成23年度は39団体、延べ7万5981人が学校開放の施設で運動をしているということです。これを1日平均にすると、208という数字になります。これは多いでしょうか、少ないでしょうか。これを人口で割ってみると1.59という数字になりました。全員が使ったとして、1人が約1.6回使ったということです。また、公共スポーツ施設の利用人数29万という数字を人口で割ると5.6になります。つまり、1人当たり5.6回使ったということです。これは多いのでしょうか、少ないのでしょうか。このことをみんなで考えてみる必要があるのではないかと思います。

統計というのは、実はほとんどが人口と施設だけを示したものが多いです。これでどれだけ何が分かるのかを知っておかなければいけません。どんな人が、どんな目的で、いつ、どのくらい、どのくらいのお金をかけて運動やスポーツに親しんでいるのかというところまで目を配らなければ、住民が何を考えているのか、どんなスポーツが実現しているのか、どんな運動の問題があるのかを考えることはできないだろうと思うわけです。

残念ながら今、野々市市にはこのスポーツ統計のデータがないということでしたので、金沢で私が2回ほど調査したデータから、市民が運動やスポーツをするというのはどんな感じなのかというのをご紹介させていただきます。

## 5. 地域住民の運動・スポーツ実施レポート

2009年の金沢市のデータでは、1年間、何も運動をしなかったとっていらっしゃる方は30%ぐらいいます。1週間に1回未満、つまり不定期でやっている人たちの割合は約20%です。この二つで約50%です。そして、週1回以上2回未満が約13%、週2回以上が約7%、週2回以上で1回30分以上が約14%、そしてさらに強いレベルでやっている人が約15%です。つまり、週に1回以上運動をしている大人の割合は49.2%でした。昨年、内灘町でも調査させていただきました。内灘では52.4%でした。全国でも大体このような数字になります。野々市市もこのぐらいではないかと見えています。

では何をやっているかという、1位が散歩で、2位がウォーキング、3位が体操です。市民のレベルでの運動、スポーツは、散歩、ウォーキング、体操です。割合で言うと、散歩は3人に1人、ウォーキングや体操は5人に1人ぐらいです。

なぜ運動をしているかという、20代から70代まですべて、「健康のため」という理由です。そして、30代から70代までは、「運動不足解消のため」という方が2位となっています。つまり市民は運動、スポーツを自分の健康のため、運動不足になっているからという思いでやっていらっしゃるということです。スポーツ団体の人は勝つことを目指して、あるいは子どもの教育のためというような思いでやっていますが、市民全体を見るとこういう結果が出てくるということです。

どこでやっているかという、一番多いのは「道路」です。スポーツ施設ではありません。2番目が「体育館」、3番目が「自宅」ということになります。散歩、ウォーキング、体操が多いので、この結果は当然だと思います。体育館が全国の値より少し多いのは、冬場のお天気の悪いときに体育館へ行って運動をするからだろうと思います。

---

ではどこですか、どこでやりたいかという、「近い」施設が良いという答えです。そして、それは大体20分で行けるところです。先日、野々市市役所の方と意見交換をしましたが、このまちならばどこに住んでいても20分もあれば市の外へ出てしまうねということでした。そのぐらいコンパクトなまちです。

そしてもう一つ、あなたのスポーツ生活に満足していますかという質問をしています。20代、30代、40代と満足の人が減っていますが、反対に50代、60代、70代と割合が上がっていきます。これはだんだん体力が低下して、このままだと立てなくなるのではないかと、太ってしまってどうしようという人たちが少しずつ運動をして改善をしていくということなのです。スポーツ生活に不満という人の割合は、60代、70代になるといなくなります。これは時間的ゆとりができて、適度な運動ができているからだと思います。これは金沢の例ですが、野々市市でも同じような結果ではないかと見ています。

まとめると、市民は、スポーツよりも運動への関心が高い。そのことから市の政策を考えると、運動を中核としたスポーツ政策を考えていく必要があるだろうということです。市民スポーツの動向を把握するデータを取った方がいいですし、そのことを市民と意見交換することは大事だろうと思っています。

野々市市は大変コンパクトなので、市内の施設を利用しやすいメリットがあります。また、フィットネスが大変多い。これは公共のスポーツ施設が足りないというものを民間が分担していて、大いに結構なことだと思っています。そこに行けば用具もあるし、プログラムもあるし、運動手法や癒し、あるいは笑いなど、さまざまな快適がパッケージして用意されています。

しかし、みんながそこに行けるわけではありません。したがって、フィットネスへ行かない人への支援が大事でしょう。また、スポーツ施設は得意な人だけのものではないということが重要かと思っています。特に学校の施設は地域住民のために最も身近な施設として考え直してみる必要があると思っています。小学校は子どもたちが歩いて通える施設です。ということは、高齢の住民の方でも歩いてそこへ行って運動できるような場であることが望ましいと思います。そうした仕組みにうまくなっているかを考えていく必要があるかもしれません。

確かにそこで大勢の方が運動をされていますが、そこで活動している人たちの姿は実はあまり見えないのです。そして、「もっと市民の皆さん、たくさんいらっしやいよ」という声はなかなか聞こえてきません。ですから、「私も行っていいのだろうか。やりたいけれど、得意ではないし」という方たちがもっと学校開放施設を使えるようなアイデアがあってもいいのではないかと思います。

## 6. 野々市市の多彩な生涯学習環境

ホームページを見せていただくと、いろいろなことが出てきました。特に注目したいところは、市民大学校講座、コミュニティカレッジ、放送大学と連携しているということです。そして、その事業は公募による企画委員が自主的に運営されていて、受講者は自主グループ研究会をつくって活動を始めていると書かれていました。学習は個人が勉強して、それを自分の中にしまいこんでしまって終わってしまうケースが多いのです。学生でもそうです。大変熱心に勉強する方はいらっしやいますが、そのことが地域に還元されているかと考えると還元されていない。それでは駄目だと感じています。自分は、例えば歴史を学んだ、まちづくりを学んだとすると、そうした市民が企画、運営者になって、

---

自主的にこのまちの生涯学習をもっと豊かにしていこうとする。こういう好循環を起こせるような工夫が期待されているのではないかと感じました。

## 7. 住みよさランキング全国第2位

住み続けたい環境づくりにおいて、「住みよさランキング全国第2位」という大変素晴らしい賞をいただいています。皆さんはもちろんご存じだと思います。これは東洋経済新報社の2012年の「住みよさランキング」というもので、公的統計を基に、「都市力」を「安心度」「利便度」「快適度」「裕福度」「住民水準充実度」の5観点で採点しています。そして野々市第2位の評価は「野々市市は金沢市のベッドタウンとして都市化が進み、人口は引き続き増加傾向が続いている。市制施行前の10年、国勢調査では人口5万1885人と、全国の町村としては3番目に人口が多かった町である。平均年齢39.7歳と人口構成は若く、市内に石川県立大学、金沢工業大学があり、20歳代（特に男性）の比率が飛び抜けて高い」と書かれていました。

「利便度」は1位、「安心度」は5位、「快適度」は13位となっています。これはどうやって評価したのかと調べてみると、「利便度」は小売業年間商品の販売額と大型小売店店舗の面積だそうです。「安心度」は一般診療所の病床、介護老人福祉施設、出生数です。788都市のうち752位だったものは「住居水準充実度」で、これは住宅の延べ床面積、持ち家の世帯比率の割合です。

## 8. 世代から見た支援の必要性

先月の野々市市の人口ピラミッドを見ると、若い世代が多いことに特徴があります。若い世帯が多く、特にその子どもたちである0歳～4歳の子どもが多い。また、学生が多いので、若い男性が多い。こういう特徴を持ったピラミッドです。

住みよさを考えるとしたら、この方たちの支援がどのように豊かであるかが、ほかの市町以上に行われている必要があると思います。例えば0～5歳児では託児や保育園、幼稚園、小児医療などの充実度が問われるでしょう。6～18歳では家庭教育の支援です。毎週水曜日は「ノーテレビ、ノーゲームデー」というのを推進されているということです。それから25～40代の方たちには、安心して子育てができる環境、60代以降は生きがい・居場所が重要ということでしょう。

市の統計では、保育所が13園、さらに増える予定だと聞いています。それから幼稚園が2園です。収容率の割合は67.7%ですので、これから若い人が増えて子どもたちが増えてもまだまだ大丈夫な状況になっているということです。さらに、病児や病後の子どもたちの面倒を見てくれる施設や対応が充実しています。また、各種の子育て関連の相談、サービスについても、大変丁寧に説明をされました。ホームページもそうなのですが、「子育て安心ブック」は大変丁寧に作られていて、「野々市市なら安心」ということが分かる優れたものになっていると感じました。

それから、医療機関の充実度も教えていただいた統計からご紹介します。総合病院ということでは、松任中央病院と日赤金沢病院は、市内の中にあるわけではありませんが、大変近いところであって、20分以内で行けます。松任中央病院には「のんキー」に乗れば、足を持たない人でも安心して総合病院に行ける。そういう仕組みが既に用意されています。人口5万のまちに、病院の数が47院あります。内科は32院、小児科5院、産婦人科3院、歯科は22院、そのうち小児歯科も大丈夫のところは10院ある。そういうものはしっかりと整っているまちだということがよく分かりました。

---

## 9. 住み続けたいまちをつくるために

野々市市の健康・生活・学習環境を担うのは誰なのかというときに、行政がもっと頑張るのか、住民が活躍するのか。これはどちらでもないです。両方が上手に役割、責任をもって取り組むことが必要です。しかし、住民の方たちがただちに市とパートナーとなって活躍することはできないかもしれません。従って市民協働に参画する市民の育成をどのように進められるかが大きな課題だと思います。

大変素晴らしい市の対応で、本当に至れり尽くせりで実現できていると思います。しかし、これがあまり良すぎてしまい、ぬるま湯に入ってしまうと市民が動かなくなります。それに対応する、それに匹敵する、市民育成をどのように進めていかれるかは大きな課題だろうと思います。

それから統計資料に表れない環境整備です。大切にしたい市民生活の品質は、一般的な統計値では示されません。例えば、何分ぐらいできるのだろうか、この施設はもっと遅くまで使えたらいいのとか、いろいろあると思います。時間です。それから空間的広がり、お金（コスト）も入れながら考えていくことが重要です。そして市民の暮らしに役立つ情報発信・受信、この再点検です。先ほどキャッチボールと言わせていただきました。市からは大変素晴らしい球が投げ込まれています。これを市民がしっかりと受け取って、そして投げ返せるか。上手に受け取れるか。そうした好敵手を育てることが大事です。そしてその情報が市民に届いているか。そしてそれを見て市民が行動できるのかということも大事だと思います。

市民がキャッチボールをするときにどんな球を投げ返せばよいのかという話ですが、私は投げ返すポイントは具体例と書かれた部分です。この枠の中に自助とはどんなものであり、そして共助の中の市民主導や市民と行政が半分ずつでやる部分は一体どんな項目なのか。そのことを市から先に答えを出すよりも、むしろ住民の方たちの声を聞きながら、「そうだよね。ここだよ。一緒にやろうね」という取り組みを一緒にやっていけるかどうか大事だと感じました。

人をどう育てるかということが重要な課題ですが、人こそがこのまちにとってとても大事なことはないか。野々市市の財産は人だと感じました。だからこそ、これから人づくりにしっかり取り組まれていかれるのではないか。その決意が第一次総合計画に示されていたのではないか。これを市民の皆さんに読んでいただいて、そしていい球をびしっと投げ返してくださるような市民がたくさんいらっしゃることを期待します。

**司会** テーマ1、テーマ2、テーマ3、それぞれについて3名の先生方から話題提供していただきました。

この後、休憩を挟み、午後1時からこの会場を三つに区画して、分科会を開催いたします。市民の皆さんがそれぞれまちづくりに関して日ごろ思っているお考えなどを述べていただく良い機会です。

午後の分科会を進行していただきます3名の方々をご紹介します。お三方とも野々市市にお住まいの方々です。

分科会1の座長は帆苺宏典さんです。帆苺さんはのいち里まち倶楽部の代表でいらっしゃいます。

分科会2の座長は山口良さんです。山口さんは野々市市総務部企画課長でいらっしゃいます。当初、分科会2の座長は佛田利弘さんの予定でしたが、体調不良のためご欠席となりましたので、変更させ

---

ていただきます。

分科会3の座長は松本泰治さんです。松本さんは石川県民大学校の講師をお勤めでいらっしゃいます。

分科会は午後1時から開始いたします。各自昼食をお取りになり、3分前にはこちらの会場にお戻りください。午後の部にお帰りになれる方は、アンケートにご協力をお願いいたします。

---

## 分科会

### 分科会テーマ1「市民が主役のまちづくり ～地域に誇りと愛着を～」

座 長：帆苺宏典氏（野々市里まち倶楽部 代表）

ファシリテーター：安嶋是晴氏（金沢大学人間社会研究域経済学経営学系 助教）

#### 【はじめに】

- ・ 話題提供でいただいた提言に基づき、私なりに組み立ててきた。地域に誇りと愛着を持つには、これから述べる4つが重要と思われる。将来の終着点は市民憲章5項目のうちの「伝統を重んじ、教育文化の香り高いまちをつくりましょう。」が1番近いと思う。「人づくり」「景観」「学ぶ」「若者を生かす」の4つ、これがコミュニティの育成の柱と言えるのでは。
  - ・ 「人づくり」・・・学び、参加し、活用する。交流の中でまちづくりをする。
  - ・ 「景観」・・・北国街道を無電柱化した。景観は、毎日毎日変化するものであるが、北国街道は、街並みとして存在する最も美しい景観として残っている。
  - ・ 「学ぶ」・・・生涯学習やインターネット等で取得した知識を活用する。
  - ・ 「若者を生かす」・・・大学生と市民が交流する。そうすることで新たな活動が芽生える。

#### 【協働とは】

- ・ 「遊びの寺子屋」で木のおもちゃを製作している。東日本大震災の被災地で工房を開いたところ、「おもちゃ＝こども」と考えていたが、工房には、たくさんのお年寄りが来て、朝から晩まで遊んでいた。木の工房だが、自分は「匠」ではない。材料や機材、場を提供し、その工房にお手伝いに来てくれる人達（学生等）と作り上げていく。そういったものも『協働』というテーマに合うのだろうか。万華鏡を作って病院に入院中の子どもたちへあげたい。間伐材でつみきを作って保育園にあげたい。被災地には半製品を持って行き、その人たちと作り上げたい。どんどん出向いていきたい。町中にある一見ムダに見えるものを復活させ、残して行きたい。

#### 【野々市の物語を持っているか】

- ・ 金沢は、歴史文化のブランド性を確立している。金沢のイメージができあがっている。野々市は富樫氏の時代の歴史を持っており、金沢市よりももっと古いブランドがあるはず。北陸新幹線開業に向けて金沢は官民一体となっておもてなしを考えている。新幹線で金沢に来て野々市にも立ち寄ってもらったとき、「金沢の隣の市に行ってきた」で終わることのないよう、「野々市に行ったら、野々市って中世から栄えているという話を教えてくれたよ」というふうになるようにしなければならない。
- ・ 「里まち倶楽部」では、富樫以前から案内をしている。先生を迎えて勉強会も行っている。正式な本にはまだしてしない。

---

### 【北国街道野々市の市】

- ・富樫氏の家系をたどっているの、何か関係のあることをできないかという思いから、勸進帳の形のお菓子を作っている。「北国街道野々市の市」は、街並みとして趣が残っている建物や史跡を野々市の資源として市民に知ってもらいたい、そのために始めた。野々市は新しいまちと言われながらも古い歴史がある。水毛生家や喜多家を見ていただくことで、みなさんに知ってもらいたい。「北国街道」は、「上街道」と「下街道」があり、その中で、名前をつけていろんな催し物をしている。いずれ情報交換をして、つながりをもてれば良いと思っている。北国街道という通りをとおして、みなさんに歴史、伝統、文化を伝えることができるかなと思っている。

### 【里まち倶楽部】

- ・せっかくのボランティア団体なのに、たとえば代役を立てなければならぬ時に、市役所関係者に任せってしまう傾向がある。倶楽部のメンバーの顔は知っているけれども名前は知らないからという理由だそう。事務局である市に何を求めているのか。
- ・垣根をどうとっばらうか、自分で考える。私は市に依存していない。
- ・キャッチボールが大事。相手を知ること、気軽に話すこと、コミュニケーションをとることが必要。
- ・それは「市民協働」のあり方、姿勢に近づいた内容と言えるのではないだろうか。

### 【野々市を知る講座を】

- ・PTA活動に参加した時に、野々市に引っ越してきた人たちから「郷土料理など野々市を知る講座があったら参加したい」という意見を聞いた。野々市に住んだことがある人は全国にいるはず。学生の間だけちょっとだけ住んだ人もいるはず。野々市を知るきっかけになるものを発信できないだろうか。観光というよりは、第2第3第4のふるさととして知ってもらい、また訪れてもらう。そういうことができないか。
- ・「富樫氏を滅ぼしたのは…」その頃の古文書が残っていない状況。何かあれば教えてほしい。情報提供してほしい。

### 【図書館建設を】

- ・図書館の存在の意味は大きいと思う。野々市の図書館は、よそから借りてもらうこともできるが蔵書数が少ない。情報発信、交流の場として不可欠だろう。建てたとしても、ただ借りるだけではなく、そこからボランティアも生まれるであろう。女川図書館長の話聞いたが、「図書館は被災した人たちのコミュニケーションの場になり、心のケアにもなる。心のよりどころとなった。図書館は非常時にも大きな役割を果たす」という内容だった。1年も早く図書館建設に着手してほしい。
- ・野々市周辺の市の図書館はどこも改築されている。生後まもなくブックデビューし、図書館を通じて、死ぬまで本とふれあう。市民にとっても大きな存在である。
- ・野々市は、人口が増え、道路、医者、お店が増えて住みやすくなっている。財政が厳しいのも事実。このまちづくりを市民（町民）が求めたのも事実。新市街地の整備に注力してきたまちであり、図書館など文化施設の建設が遅れているのは事実。今、「市民協働」ということで、「みなさんでやり



---

ませんか」という球を投げられている。市民が主役の時代なので、「ない」「できない」なら、自分たちで、先に市民が動いてもいいのではないか。そんな時代に来ていると思う。他には、私営の図書館もある。

#### 【野々市の歴史を伝えよう】

- ・数年前の「じょんからまつり」のとき、イベントで来ていた芸能人が子どもたちに「野々市ってどこ見たらいい」と聞いたところ、「サティ、イオン、ラウンドワン…」というような答えしか返していなかった。郷土愛がないという危機感を覚え、里まち倶楽部を立ち上げた。野々市の深い歴史を広めようと4人のメンバーからスタートした。野々市の歴史を伝えよう、現場で伝えようということで、御経塚遺跡や末松廃寺跡などに案内表示を立ててもらおうようお願いしてある。当初は7カ所の計画だったが、33カ所に増やしてもらった。設計中の富奥公民館の改築に際して、どんな公民館にしてほしいか市民から希望を聞いていた。これも市民参加の一つだと思う。新しい公民館には展示室を作ってほしいと言った。親子で楽しめるような情報コーナーを作り、虫送りの太鼓や手ぬぐいなど、町内で持っている展示できそうなものを展示したい。また、調理室も作り、災害時に貸そうと考えている。
- ・これまでの話は、歴史に重点が行っている。市民と民活がないとやっていけない。古い住民と新しい住民が対立しているような状況で、どうつないでいくかが問題である。
- ・歴史を知って、新しいものを作る。新しいものを作り出す受け皿づくりをしている。
- ・市内のお祭りに参加しておみこしをかつぐ等、参加することによって歴史を知り、伝統的なお祭りで古い住民と新しい住民とつなげていけるのでは。市全体で盛り上げているお祭りはあるか。
- ・春には「椿まつり」、夏には「じょんからまつり」がある。その他、各地区のお祭りもある。野菜みこし、獅子舞、みこし、虫送りなど。
- ・「どれだけやっているか」、若い人たちへのアピールが大事。工夫が必要。
- ・ある時期だけ参加というのは、フィールドが成り立っていないということ。富奥公民館にパネルを展示してあるが、説明をしてくれる人、伝えてくれる人が常駐していない。箱を作ったなら、学ぶ人、伝える人がそこにいなければいけないだろう。
- ・小学校の総合の学習でまちを知る機会はあるのか。
- ・御経塚遺跡を中心に学習をし、壁新聞で学習内容の発表をしている。
- ・小学生のころ、「御経塚遺跡に行っただけ」「喜多家を見ただけ」という感じで、事前に何の学習もなしに見学に行ったことはある。里まち倶楽部に参加している学生が多いなら、学生に学べるような機会を提供してほしい。「観光で人を呼ぶ」というよりも先に「市民が自分のまちを知る」。そうじゃないと、呼べないのではないか。
- ・里まち倶楽部は、観光を目的としていない。市内の親子や学生に野々市を知ってもらい、その人たちが野々市から出たときに、「野々市はこういうところだ」と伝えて行ってほしい。それがねらい。
- ・じょんからおどりを昔から知っているが、実際踊るに踊れなかった。参加することが一歩。小中学校の運動会でじょんからおどりを踊る、祭りに参加する、その積み重ねが第一歩となるのではないだろうか。

---

【最後に】

- ・野々市に携わったのは、みなさんと同じくらいの期間。何事にもぜひ参加してほしい。

---

## 分科会テーマ2「地域資源の創出 ～野々市の個性を引き出すには～」

座長代理：山口 良（野々市市総務部企画課 課長）

ファシリテーター：大友 信秀（人間社会研究域法学系 教授）

### 【何が野々市の個性か】

- ・ ボランティアガイド「里まち倶楽部」には工大生や県立大生が参加しているが、若い人の意見は  
おもしろい。外からの目は違う。
- ・ 野々市には、海も山もない。野々市のお土産は何かと考えると、ただのたまごせんべいに野々市  
にゆかりのある事柄の焼印が押されているだけ。今では商工会のショーケースの隅に並んでいる  
だけ。新しいものの掘り起しだけでなく、お蔵入りしているものにも光を当てる必要があるので  
はないか。
- ・ 石川県は、モノづくりはうまいが、ブランドコミュニケーションがうまくいっていない。外から  
の目線で発信できていない。どうやったら売れるかを考えながら地域資源の掘り起こしをしてい  
くべきである。県立大学や金沢工業大学ともしっかり連携していくべきだ。
- ・ キウイワインとか椿の花酵母の日本酒を作っているが、目標を掲げているのか。どれだけ生産す  
るか、誰に買ってもらうか。ブランドコミュニケーションはそのあとではないのか。

### 【売り出し方】

- ・ 生産高や売上金額を決める前には、どのくらいの人にどれだけ買ってもらえるかを考える必要が  
ある。商品開発する際には、目標を決めるより先に、どういう風にしたら目的を達成できるかを  
市場調査したり、話し合ったりする必要がある。先に目標やノルマを作ると営業の方がノルマを  
達成するために楽しくない売り方をする必要があるのである。そうすると大きく作ってもなかなか続かな  
い。ターゲットにどれくらい受け入れる幅がどれくらいあるか当たりをつけた方がいい。
- ・ 野々市は何もない。もともと田んぼしかないし、今もない。ビジネスになりにくい。そのときそ  
のときで判断して動かなければ失敗する土地。名前のおり「市」である。何かデザインして将  
来を見据えてやっても野々市では通用しない。走りながら軌道修正をしていく必要がある。

### 【大学の活用】

- ・ 失敗しても、大学の若い人がせっかくおもしろいことをやったんだから続けていくべき。毎年毎  
年学生は入れ替わる。一回やって失敗したからといって今の状況でならどうなるかわからない。  
何かを生み出すスピードと数が、質と物を作っていく。
- ・ せっかく大学があるのに、学生のおもしろい取り組みが能登や加賀の方に流れてしまっている。  
そういったパワーを野々市で活かすことが必要。

---

### 【キウイビネガー】

- ・キウイビネガーを三國シェフに使ってもらって「これはいいね」となれば三國シェフの弟子にも使ってもらえて有名になる。野々市市はお茶の世界では最高の花とされている「侘助」の里である。ichi 椿に使った酵母もそういう花からとればお茶の世界にも売り込むことができたのでは。
- ・「侘助」からも酵母をとったが発酵能力が足りなかった。

### 【野々市の水】

- ・「のっティの水」を売ろうという発想がわからない。これは行政でやらなくてもいいのでは。他の市町を真似して作っているようで発想が乏しい。思考が硬直化しているのでは。
- ・「野々市の水がおいしい」ということを住んでいる方に再認識していただくとともに、「野々市はおいしい水の出るところ」と印象づけることで、定住促進につながるのではないかと企画したもの。
- ・でも、その土地のものを安心だと PR するのは新しいアプローチでいいと思う。

### 【住みよいまち】

- ・野々市市が住みよいまちとして PR することが目標だが、あまり急いではいけないと思う。短期間で結果を出そうとするのではなく、住民がよさを実感して受け入れることができればそれがブランド力につながるのではないか。
- ・物に対してだけではなく、子供に特化したなにかをしてあげることで、将来的にもっとよい市になるのではないか。それが資源となるのではないか。

### 【人が財産】

- ・野々市は来る者は拒まないが、出るときにははっきりと後始末をさせるべきである。そういう発想をしなければこの先ずっと残ってはいけない。大型スーパーが撤退するときには、跡地を農地として活用できるようにしてもらおう。
- ・野々市は便利になったが、思い出や財産がなくなっているのではないか。52000 人からいる子供たちからおじいちゃんおばあちゃんは財産である。これを繋げていき、伝承された技や知恵を子供たちに伝えていきたい。ものだけではなくそのバックグラウンドのストーリーを大切にしていきたい。

### 【北陸新完成の開通に向けて】

- ・北陸新幹線の開通にあたって、石川県として観光をどういう風に持っていくのか。金沢まで来た人をどうやって野々市まで連れてくるのか。近隣の市町とどういう風に協力していくのが大事。ちょうど商工会の会長がいるので聞いてみたい。
- ・非常に難しい問題。金沢に行けばなんでもあるため、野々市にはなにもない。金沢のブランドに負けてしまう。「お山行けばいい。お山行けばなんでもあるわ。」という意識。お店ができてもすぐにダメになってしまう。新幹線で金沢に来た人をただ引っ張ってくるだけではダメなのではないか。それを何とかする工夫ができれば、それが野々市の資源になるのでは。

---

#### 【情報伝達】

- ・野々市の資源は情報インフラではないか。インターネットに繋がる環境はトップクラスだと思う。また、治安がよく、安心安全なまちである。
- ・野々市の職員で、ちょうど育児休業をとっているが、男性で育児休業をとった人をほとんど知らない。そういう新しいことをしてもそれをみんなに伝える場がない。地域においても自由に伝えられる場があったらいいのでは。

#### 【歴史資源の見直し、行事への参加】

- ・職員になって気づいたが、昔の話を全然知らないこと。歴史資源をもっと大切にしていきたい。自分と同年代（30代前半）が一番野々市について知らないのではないか。今の子どもたちは小学校の総合学習などで勉強するが、その親は、他の場所から引っ越してきた人が多い。そういった人の中でも、地域のイベントに積極的に参加しない人をどうしたら巻き込めるのか悩んでいる。

---

### 分科会テーマ3 「住み続けたい環境づくり ～生涯にわたる健康を～」

座 長：松本泰治（石川県民大学校 講師）

ファシリテーター：佐川哲也（金沢大学人間社会研究域人間科学系 教授）

#### 【『若さ』について（若いまち、若者）】

- ・若いまち（若い人が多いまち）であるが故に、人と人とのつながりが弱い。
- ・体育協会も若い人が少なくなっている。若い人が担当となり活動に参加していくことで、このまちに愛着を持ってくれるのではないか。
- ・『若者、よそ者、馬鹿者』が地域を変えていく要因である。
- ・若い人の住居（アパートなど）はオートロックであり、表札もない。どのような人が住んでいるのか知ることができない。コミュニケーションを取れない。
- ・PTA（子育て世代）を地域の活動に巻き込めないか。
- ・学生の活動（創る部など）に大人が関心を持っているのか。
- ・例えば学生の多い京都では学生が経済活動を担う一角である。若者が動くことでまちの新しい方向性が生まれてくる。
- ・学生や子育て世代の一部は一時的な居住者である。これらの層（特に子育て世代）に今後如何に住み続けてもらうかが大切。
- ・地域に学生がいることを、元から住む者たちが認めてほしい。
- ・学生に普段から挨拶などで声をかけていき関係性を少し深める。親しくなっていくにつれ、学生たちが何を思っているのか知ることができる。

#### 【住環境づくりについて】

- ・住みよさランキングは総合2位であるのに、住居水準充実度が低いのは如何なものか。
- ・団地の老朽化、空き家の増加について。
- ・狭いまちであるため、今後人口を増やすだけではいけない。
- ・空き家を地域の高齢者の集まる場にしようという活動が考えられている。これは地域福祉計画に織り込まれる予定である。
- ・金沢市などのように、景観や環境保全のために建物を建てる際制限を設ける条例を策定してみてもどうか。
- ・人口増加を良しとする考えを一旦止め、市の活動を顧みる（整理する）べきではないか。
- ・以前は美しい景観があった。これらを保っていけるよう活動して欲しい。

#### 【その他について】

- ・住み続けたいまちをつくるのは「人（市民）」である。

- 
- ・一人一人が担い手のまち。担い手たるべき人になるには生涯教育が必要。野々市のことについて知る教室を開いてはどうか。
  - ・周りとの繋がりが弱い人の思い（SOS）は届いてこない。
  - ・市が発信している情報を全ての人が等しく得られている状況ではない。特にパソコンを使ったホームページなどからの情報。
  - ・NPO団体が人口の割に少ない。日中の活動を金沢市や白山市で行うため、そちらの地域のNPOには参加しても、野々市市では参加していない人がいるのかもしれない。

【まとめ】

- ・明日の野々市を語る機会づくりが必要である。
- ・学生を巻き込み、学生によるまちづくりを行う。
- ・住み続けるための、市民への教室（勉強会）を開催し、野々市を知ってもらう。
- ・美しい景観の保全。美しい景色を楽しむウォーキングコースの作成や市民農園の促進などを図る。
- ・人と人との繋がりの強化が重要。

以上

---

## 全体討論

進行 松下 重雄（金沢大学地域連携推進センター地域連携部門長・准教授）

第1分科会座長 帆苺 宏典 氏（ののいち里まち倶楽部 代表）

第2分科会座長 大友 信秀 氏（金沢大学人間社会研究域法学系 教授）

第3分科会座長 松本 泰治 氏（石川県民大学校 講師）

---

**司会** これより全体討論に移ります。テーマ1、2、3の順で、座長からお1人約7分で、各分科会の発表をいただきます。その後、会場全体で約30分間のディスカッションをいたします。全体討論の司会進行は金沢大学地域連携推進センターの松下重雄地域連携部門長が務めます。

**松下（進行）** 地域連携推進センターの松下です。よろしくお願ひします。悪天候の中、朝からありがとうございます。こんなに最後までいてくださるとは思いませんでした。うれしい限りです。

後半は全体討論となっていますが、時間的に1時間弱しかございません。なるべくコンパクトに話を詰めていかれればと思っています。私は司会進行役ということですが、午前中に佐川先生などから、大変素晴らしい市の基本計画が出来上がっているという話題が出たと思います。私の手元にも市の方からいただいた冊子があるのですが、冊子としても非常によくできています。今日三つのテーマが設定してありますが、この中の重点プロジェクトに合わせた形である程度設定しています。基本計画の冊子をよく拝見しますと、その重点プロジェクトの上位概念として基本計画の骨子があり、それに三つの柱が立っています。一つが市民協働のまちづくりです。これは重点プロジェクトと一緒にですが、もう一つは公共の経営を推進していくということで、市民満足度の最大化を目指し、行政の経営をしていくのだという、ニュー・パブリック・マネジメントと言われるような新しい概念を取り入れています。三つ目の柱は野々市ブランドの確立ということです。この三つの柱を具体的に展開していくための三つの重点プロジェクトということで、今日の三つのテーマがあります。

私は分科会の会場を3分の1ずつ回らせていただきましたが、非常に活発な議論がされていました。それぞれの分科会でどんな活発な議論が行われたかを座長の方々にご紹介していただきます。

それではテーマの番号順に、テーマ1「市民が主役のまちづくり～地域に誇りと愛着を～」について帆苺様からお願いします。

### ■分科会発表

**帆苺** 第1部会では安嶋先生の基調講演を基に、野々市の市民憲章「伝統を重んじ、教育文化の香り高いまちをつくりましょう」というところに最終的には行くように思い、話を展開しました。まずは人づくり、2番目は守りつくるという景観、それから学びと参加と活用、そして4番目に若者を生かす。そして最終的にはこの四つの項目をスムーズに育て上げるためには、東日本大震災で発揮できた日本人の良さを育てた六つの相互性、つまり、異なる価値観を相互に容認・理解する、相互に信頼する、相互扶助、そして相互依存し、相互に発展するというところに視点を置いて話を進めることにし



---

ました。

そして具体的に話を進めた段階で、順序はばらばらになりますが、市民参加を真剣に考える時期を迎えたという認識に立とうということ。そして市民協働に対する参加の意識、心構え、参加の姿勢のあり方を確認しようということ。コミュニケーションをいかに育てるか、キャッチボールをいかにうまくやるかということが、市民協働のポイントだろうということから入りました。

まず提案の受け皿をつくること。県内外、広域にわたって交流できる人材の育成も必要であるということ。そして、人材育成に当たっては、図書館が非常に大きな舞台になるのではなかろうかということです。図書館は幼児から生涯学習の中心としての機能を持っているので、これをいち早く拡充し、そこに市民が参加をして、人材育成の一助に備えるという意見が出てきました。

具体的には、被災地で非常に関心と呼んだおもちや工房。これは木工の廃材などを生かしながら、ワークショップをつくり、そこへ被災地のお年寄りから子ども、若い人、さまざまな方が集まって一つの大きなコミュニティの場になったという事例です。それを基にして、本町の町筋の古い民家、使っていない家をお借りし、工房として大学生や市民が集まる場所にしてはどうか。こういうものに対して市がゆとりを持った考え方で対応できるようにしてもらいたいということです。

それから、歴史文化に関しては、既存の資料だけではなかなか周知徹底できない。今一度掘り起こす。そのために、コミュニティカレッジや里まち倶楽部へ参加し、座学を通して、現場を通しての勉強を重ねた上で、その編纂に対して協力をしていく。新しい歴史を踏まえた物語をもう一度確立する努力が必要ではないかということでした。これは金沢の近世に対して、野々市中の中世、いわゆる古代からある歴史をうまく生かさなければいけない。それと同時にじょんからや野々市の市、北陸道から北国街道の歴史も分かりやすく加えていくということです。

一方、学校教育の場でも、小学校の段階からきちんとしたふるさと教育をもう一度考える必要があるのではないか。そんなことがあったのかなということではなくて、小学校に対しても地元の、ふるさとの意識を育てる教育を今一度見直す必要があるのではないかということが議論されました。

大略的にはこういうことが一つの骨子になっているわけですが、情報提供者を育てること。また、情報提供のできる人材を育てること。この人づくりというものが協働参画の意識を育て、行政と市民との協働による事業がスムーズに育っていくのではないか。ここでボランティアの意識も変えることができるのではないかということで、最終的に話がまとまりました。

**松下** どうもありがとうございました。人材育成というポイントと提案の受け皿を作ることが大切だという提言があったと思います。具体的な提案がいろいろ出て、非常に良かったと思います。多世代の交流ができる仕組みや、地域の価値観を再構築するよう仕組み、ふるさと教育をもっと活発にという話だったと思います。

続きまして、テーマ 2「地域資源の創出～野々市の個性を引き出すには～」ということで、大友先生にお願いします。

**大友** テーマの2に関しましては「地域資源の創出」ということで、当初佛田さんが分科会の司会をなさるということで、相当期待して下さっていた方もいらっしやったと思いますが、インフルエンザで、代わりに私が司会を務めさせていただきました。幸い、参加して下さった皆さま方のご協力

---

があり、かなり活発な議論になったと思っています。ほとんど間延びせず、退屈せずに終わりました。

具体的には、「地域資源の創出」というタイトル自体が問題なのではないか、資源というのは既にあるものなのに、創り出すとはどういうことなのかという非常に本質的ないい質問をしてくださる方がいらっしゃいました。ただ、地域資源の場合には目に見える形で存在していると意識するところまでいくのが大変で、それを見つけ出す作業がまさに「創出」というのにふさわしいぐらいの作業になるというように言いました。

そして、こういう個性をつくっていくためにはどうしたらいいのだろう、これからどういう取り組みが必要なのだろうということで、具体的にお話いただきました。例えば商工会関係の皆さまからは、実際に今取り組まれている新商品開発等について苦勞なさっている現場や、あり得る解決策などについての報告と、それに対する質問やアドバイスをいただきました。

例えばキウイフルーツのビネガーの開発をしてくださっているようですが、そういったものに関して売り先をどのように特定しているのか。新しい商品として東京のレストラン等に紹介していくなどという手法があるのではないかとということが参加者の中から提言されました。

さらには、民間の事業としての取り組みだけが個性づくりではないはずだ、住民活動、住民の意識づくりに関係する個性の創出はどうすればいいのかというような指摘もいただきました。それに関しても、民間企業の場合は、そういった事業を短期、中期、長期で計画しますが、行政は基本的には単年度で考えることが多い。お子さんに野々市を好きになってもらうために野々市の個性を伝えていくというような活動は、かなりスパンが長い。大人になることまで考えると20年、それからまた子育てでここにいたいと思わせるために30年、40年、次の孫の世代までということを考えていくと永久の活動になるかもしれない。そういうことを一緒に俎上で考えられるのか。これについては答えはありません。野々市の皆さま方に相互に交流を深めていただいて、市民感覚で民間の方にも普段気付かないような視点を与えていただければありがたいと思います。また、民間の方からも市民の皆さまに、もっとコスト意識を持った方がいいというようなことも伝えていただければと思っています。

そういったことをかなり幅広くお話しさせていただきました。最終的には、非常に重要なお希望、ご指摘をいただきました。今日は野々市市と金沢大学が連携してプログラムを組んでいて、民間の方々のご参加もいただいていますので、産学官連携というはやりの活動ですが、こういった活動を今後大学はちゃんと継続してくれるのかというご質問をいただきました。

今日は学長はもうお見えではないので、各種センター長がいらっしゃると思います。大学や役所はその役職にある方が責任を問われるので、その方が「やる」と言ったらできる。その点についてお聞きになりたいようでしたら、懇親会の場でセンター長を探していただいて、ズバッと聞いていただくと、飲み物等がまずくなって非常にいい経験になると思っています。

答えはありません。それぞれの活動で若いリーダーを見つけていただいて、多種多様な分野の方をまとめていただければ、今日の続きができると思います。懇親会でもさらに本音やご意見をいただければと思っています。

**松下** どうもありがとうございました。私も最後のところだけ拝聴させていただいて、その質問はやはりいい問い掛けだったと思います。ぜひ若いリーダーと責任を取れる教員をうまくつかまえて、大学との連携を続けていければと思います。

---

続きまして、テーマ3「住み続けたい環境づくり～生涯にわたる健康を～」ということで、松本様、よろしく申し上げます。

**松本** 第3分科会を担当した松本です。さまざまな意見が出たのですが、上手にまとめられませんので、出た意見を羅列的にご報告させていただきます。

タイトルは「住み続けたい環境づくり～生涯にわたる健康を～」となっているのですが、健康にあまり焦点を当てられませんでした。半分ぐらいは第1分科会の「市民が主役のまちづくり」にかかわるような意見でした。

参加された方は25名で、子育て世代が3名、仕事盛り（35～50代後半）の方が10名ぐらい、60歳以上のシニアの方が13名という構成でした。参加された方それぞれ自分の価値観、関心領域が違いますから、住み続けたい環境づくりとなった場合、あまり話があちこちへ行ってはいけないので、皆さんの関心領域の高いものについてお聞きしました。すると、子どもを育てていく上でいいまちであってほしい、これに価値を置きたいということに大きな支持がありました。それから、ご年配の方も結構いらっしゃるので、医療の施設や介護の施設の手当は十分なのかということに関心があるという方もいました。三つ目は景観です。野々市に住んだ目的は、上林の方からずっと田んぼ、水田、畑という自然景観、農のある風景で、それに価値を置いてきた。それがなくなっていくと満足が得られなくなるという方もいました。四つ目は健康です。この4点あたりが、当面暮らしていく上で皆さんが望んでいらっしゃる、価値を置いていらっしゃるポイントと言えらると思います。

個別に申し上げます。住宅関連の仕事をしていらっしゃる方がおっしゃいましたが、今は45%が持ち家で55%が借家という居住構成になっているということです。まちはどんどん大きくなってきたけれど、多くの人がまちを知っていない。まちを知ることから自分のかかわりなり、問題点、課題、市民協働のまちづくりへの自分なりの提案、提言が出せるだろう。だから、もっとまちを知りましょうという提案が一つありました。

二つ目は住みよいまちの点数で2位というのは本当かと問われました。70年間住んできたという方がおっしゃっていましたが、私が住んでいるところは空き家が増えてきている。住ということについては752位で、ブービーに近いようなところにいる。これにもう少し焦点を当てるべきではないかという意見が複数ありました。

それから、町会から始まって、体育関連のかかわりを持っていらっしゃる方もいらっしゃいましたが、役員が限られてしまっていると。固定されたメンバーで、今年もおれがやらなければいけないという状態が続いているし、これからも続きそうだ。若い人がなかなか替わってくれない。そこに対しても働き掛けもしなければいけないのしょうけれども、現状は固定された、ある程度年配の方中心の運営になってしまっている。これは問題だろうという提案がございました。

それから、若者もいろいろな活動をしているし、いろいろな提案をしている。それをご存じない人が相当多そうだと指摘されている方がいらっしゃいました。要はそういう人と情報の交流の場がないと、なかなか情報をキャッチしにくいし、伝わっていかない。これは午前中の先生方の提案もありましたが、そういった人と情報の交流の場がやはり要ることが少し見えてきたと思います。

それから、まちづくりに当たって、市もこれからもう少し大きくなるのしょうけれども、やはり基本をちゃんと持っておかなければならないだろうとおっしゃいました。人口が増えることはいいこ

---

となのか。まちが大きくなることはいいことなのか。大きいことはいいことだというのは、戦後の日本が経済を最優先に、ほかのことはほったらかしでばく進してきた結果、いろいろな問題が指摘されています。道徳心の問題も教育上、非常に大きな課題になっています。そういう大きいことはいいことという発想になってしまうといけないという意見も出されています。だから、人口を5万5000ぐらいで1回止めて、まちの総点検をしてみてもいいのではないかと。大きくしようと旗を振ってばかりいて、あとは役所の方にお任せしておけば間違いないだろうということではいけないのではないかと。そういう思いを持っていらっしゃる方が結構いらっしゃいました。

また、大きくなるにしても、品位・品格のないまちはいくら大きくなっても値打ちがないと感じられる方もいらっしゃいます。品位・品格のあるまちも私は大事な視点ととらえました。

これは佐川先生から提案がありましたが、若者のまち、人の出入りも激しいということが野々市の特徴でしょうが、まちづくりなり住みよい環境を考えていくコアになる人々、層は、このまちにずっと住み続けていくという覚悟を持った人たちでないと駄目だということです。そのとおりだと思います。

それから、年配の方から、市のホームページは完備していて、内容も充実している、広報もちゃんと出ているというけれど、それは出す側の評価であり、逆から見ると、広報を読まないという人がいるし、パソコンも触らない人が少なからずいるのだから、そういう人向けのフェイス・トゥ・フェイス、温かい情報伝達のをきちっとつくっていかなければ駄目ではないかという意見もありました。

それから、シルバー人材センターには今390名余り登録されていますが、あまり活躍の場がない。これも何とかしてもらいたいと。ソーシャルビジネス、社会事業のようなニーズはあると思うのですが、仕事が来ない。これはミスマッチがあると思いますが、それも市の課題としてあるのではないかと思います。

あとは、市の職員の方が記録されていますから、またホームページか何かで出るでしょうから、ぜひ見ていただきたいと思います。

**松下** ありがとうございます。非常に多岐にわたる話題を上手にさばっていただいたと思います。これで三つの分科会の基調報告を終わらせていただきます。

## ■質疑応答

**松下** それでは、全体討論の後半に移ります。今、三つの分科会よりご報告がございましたが、第1分科会で安嶋先生から補足があればお願いします。

**安嶋** 少し気になった点があります。それは、「協働」という言葉が皆さんの理解の中で少し誤解を招くのではないかと心配になったのです。「協働」は役回りを決めてお互いの強みを生かしながらやっていくことであるにもかかわらず、それが明確にならない中で「協働」という言葉を使うことによって、結局、仕事自体が自分の仕事ではないのではないかと、自分の責任が明確にならない可能性があると感じました。佐川先生が施策の中で協働を進めるときに、個々の施策について何をやるかという役割分担をきちんと明確にしないといけないという話をされていましたが、まさにそういう部分があると

---

感じました。

また、第1分科会の議論の中で、自分がやるというような意欲の話よりも、むしろこういうことをやってほしいという意見が先行した部分があるので、今後は市民が主役で、自分たちが何をやるのか、こういうことが自分ではできるということを前向きな意見として出していくような、創造的な議論の場に進めていければいいと感じました。

**松下** まさにそういうことだと思います。第2分科会で追加するようなことはございますか。

**大友** 後の議論にも関係する点ですが、今回個性を引き出すというテーマの下にいろいろなお話をさせていただいたので、具体的な作業をどういうふうにするかを理論とも兼ね合わせながら、マーケティングやブランディングの考え方も兼ね合わせながらすることが多かったのです。ただこういうことは、理屈を知っていた方がいいのですが、理屈を知っているだけでは駄目で、実際にやってみないといろいろなことが見えてこない。実際にいろいろな人と協働作業をして、その中でブランディング、マーケティングをしていくと、こういうことが意外とうまくいかない、こんなことは意外と理屈どおりではなかったとか、理屈を無視しても、この人がいてくれたから何とかなってしまったということがあるのです。そういう意味では、第1分科会や第3分科会でしてくださっていたお話を本当は絡めて行うことができると、より現実味も出て、皆さんの議論もさらに活発になったのではないかと考えていました。

**松下** それでは第3分科会の佐川先生、お願いします。

**佐川** 25名の方が参加してくださいました。ありがとうございました。ここへ来てお話をしてくださる方は、いろいろな意見を持っていらっしゃる方ですが、まち全体では、意見をお持ちでない方もいらっしゃいますし、持っていても言わないという人もいらっしゃると思います。皆さんの意見を聞きながら、「住み続ける宣言などを昔はしたのだろうか」と思いました。これまではそういうことを考えずに住み続けてこられたのだらうと思いました。市がこのような計画を作り、もっといいまちにしようという一つの言葉の言い換えが住み続けるまちということだと思います。

そして、この言葉を投げ掛けられたときに、そのためにはもっとこうの方がいいねという思いを持っていらっしゃるがよく分かりました。しかし、投げられたボールをちゃんと投げ返すことが大事だと思います。もっともっといろいろな形で、例えば今隣にいらっしゃる方とそういうお話をしたり、地区の中で話をしたり、市に向かって話をしたり、そういう機会を増やししながら、そんなことをもっとやらなければいけないのではないかと感じました。まちはただボールを投げたと言わずに、もっと投げ返してくれるような工夫が要るのではないかと感じました。聞けばいろいろなアイデアはあるのですが、本当に上がってくるかどうか。そのことが大事だと感じています。

**松下** ありがとうございます。それぞれ論点同じようなところもございますし、先ほど大友先生がおっしゃったように、三つの分科会で出た話題を本当は時間をかけてもう少し盛り上げていきたいというところはあるのですが、なかなかお時間がありません。

---

今、三つの分科会からそれぞれご報告がありました。ここで会場の方から、ご質問やご意見があれば賜りたいと思います。

**質問者 1** いろいろと教えていただきありがとうございます。一番大事なのは野々市らしさを失わないように進めていくということです。市民農園を作ったり、いろいろなことがあるのですが、どこでもありきたりなものでなく、野々市しかないというものも織り込むような努力をする必要があるということをお話したいと思います。

**松下** ありがとうございます。

**質問者 2** 私は第1分科会に出たのですが、今日は市の共催なので、市の方をお願いしたいことが一つあります。最初に熱い市長のメッセージ、市民に問い掛けがあり、それに対してみんながそれぞれの思いで意見を言ったのですが、それを市がどう受け止め、どう応えていくのか。ただ聞き置きで、ホームページなどにこういうことがありましたと羅列して終わるのか。これは今後のタウン・ミーティングなど、対話を生かしていく上で一つの鍵だと思うので、市の対応をお聞きしたい。

**山口（野々市市企画課長）** これが最初だと思っております。市民との対話を通じていろいろな施策に生かしていきたいと思っています。そのために市民協働のための、まちづくりの条例みたいなものも今後作っていかうと思っています。どんなことをして、皆さんの意見をくみ取って、それを施策に反映していくか、その仕組みづくりが今後大切だろうと思っています。今、われわれも一生懸命勉強させていただいているところです。こういった意見を決して無駄にすることなく、今後につなげていきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

**松下** 前半のセッションでもお話がありましたとおり、市民協働の仕組みづくりや場づくり、あるいは今お話のあった協働作業の中でいろいろ理解していく。そういう中で、市民の方々と行政の方々と協働をつくっていくのだらうと思います。

今、野々市らしさがあることが大切というお話も出ましたが、大友先生、お願いします。

**大友** 分科会でも同じようなことをいろいろな視点から議論させていただいたと思いますが、例えば輪島に輪島塗があるように、金沢に兼六園があるように、そういうものがその土地らしさかと言うと、ああいうものも住民のそれぞれの方とはそれほど近くなかったりするのです。自分が子どものころから育った、今日も若いころに野球部において走っていたときの空気の香りまで思い出すというお話もしていただきましたが、そういう記憶の積み重ねが、その方にとっての野々市らしさになってくるかもしれない。いろいろなことが言えるとしか言いようがありません。

そういう野々市らしさの中に共通のものがあって、ぜひみんなで共有したいとか、伝えたいというものを見つけていく作業が大事ではないか。無理やり市がリードしたり、大学がかかわってつくらせるということではなく、皆さんのいろいろな活動の中でそういうことが出来上がってくるのが理想論です。

---

ただし、ものによって、先ほども住民の方がこれから住みたいという気持ちをつくるための個性づくりや個性を発見する作業、それから民間の方が事業をしやすくなるための個性の発見や地域資源の発掘もあります。民間の方の場合、そんなに悠長に言っているのは商売が成り立たないということもありますから、ある程度機動的に動ける、あるいは早く動けるように強制的な作用を施す仕掛けづくりも要りますが、それを見誤って、住民の方にそういうことをやってしまうと、元も子もありません。フロアの皆さんを含めた野々市の方からご提案いただいて、こんなことをやろうとしているけれどもどうかと言っていたら、「面白いですね」とか、「いや、それはかなりまずいですよ」と言うことはできると思います。

先ほども課長さんから、今日がスタートだというお話がありましたので、これをきっかけにいろいろなことをお持ち帰りいただいて、1回話し合いや活動を試みていただきたいと思います。何かもめたら、それはあのときにタウン・ミーティングをした金沢大のせいだ、もう一回戻ってこいとおっしゃっていただければと思います。

**松下** ありがとうございます。市民の方から発意されることが大切というお話と、きっかけづくりであるということと、大学もきちんと責任を取るの、どんどん声を出してくれというメッセージだったと思います。

**質問者 3** テーマ1の分科会に出ました。午前中の部で安嶋先生から野菜に関連する提言があったと思いますが、分科会ではひと言も出なかったのが残念でした。先生の提言で、最終的にはどうなるというビジョンが私にははっきりよく分からないので、そこを知りたいと思いました。

それから、野々市市では先生の提言を今後審議されるのかどうか。せっかく提言されたものを無視して終わってしまうのか、きちんととらえて審議して、先生に「こうします」、あるいは市民に先生の意見をこういう形で生かしますという話まで持っていくのかどうかを知りたいのです。先生の方から、あと少し、加えていただければ助かります。

**安嶋** あれは、こういうような考え方もありますという、考え方の道筋を少しお示しただけであり、決して提言という位置付けではありません。実際に私は野々市市の住民として6年間住んで来て、実際に野菜御興を担ぎ、いろいろな地域の方とお話をする中で、こういう資源があるという認識をし、私の発意でこういうふうなことをやっていきたいということを感じたということであり、第1分科会でこれを議論しろとか、市にそれを採択しろということは全く考えていません。

でも、一緒にやりませんかということは私はぜひ申し上げたいと思います。これは少しずつ積み上げていくと形になるのではないかと考えていますので、自分から進んで取り組んでいきたいと思っています。またよろしくお願いします。

**松下** 「高級野菜のまち『野々市』」は、私もとても面白いと思いました。もう少し安嶋先生が早くそのアイデアを教えてください、それをケーススタディにしてここで議論しても面白かったかと思っています。

---

**質問者 4** 金沢大学の宇野と言います。逆に、市民の皆さんと行政の皆さんに問い掛けをしたいと思えます。私は金沢市に住んでおりますが、私の印象に残っている野々市の一番の良さは、10年ほど前に、金沢市との合併をかたくなに拒否し、独立独歩の道を歩まれたことです。これが一番特徴だと思います。そのとき、安田町長は「おれたちは富樫だ。前田じゃねえんだ」とおっしゃいました。これは非常に名言だと思っています。その気概、特徴、金沢との違いをどう出していくのかというところが、私は一番、野々市の特徴ではないかと思っています。

帆苺さん、そういう当時の気概、あるいは市民のマインドは今はどうなっていますか。

**帆苺** 第1部会の中でも、そのお話が最初に出ました。残念ながら野々市は富樫の一向一揆で滅び、しかも明治の大火であらゆるものを失ったので、勝者の歴史に書き換えられて何も残っていないというのが最近の認識です。そうした中でも、富樫の歴史だけでなく、飛鳥・天平の時代の歴史から始まる、それ以前の縄文から始まっているわけです。北は御経塚、南は末松廃寺という、広範囲に歴史がひそんでいるわけです。そういうものを掘り起こして、それをきちんとした姿で子どもから大人まで伝え、それを誇りとして生活するようにもう一回つくり直そう。そういうことが大切ではないかという話が、この会合のスタートで出ました。そういう意味ではまだ皆さんの心の中には、そういうものがたくさん残っているのではないかと私は思っています。

**質問者 4** 皆さんの中からその話を聞きたいのですが。

**質問者 5** 私は野々市に40年余り住んでいるわけですが、今先生のお話を聞いて、金沢と野々市という話がありました。私自身はこのエリアで経済活動を行っているわけですが、金沢と比べるとということはあまり思いません。つまり、敵は金沢ではなく、もはや全国であり、世界であると思っています。

例えば、東洋経済新聞社から出された資料についても、「全国2番目に住みやすい市」などというのは、金沢と比べてやっているわけではないです。あるいは私は不動産とか住宅をやっているわけですが、何か誘致するときなどでも、金沢にないものを野々市に持ってこようというわけではなく、野々市のブランディングを高めるためにこういうものを持ってこようということで、会社の中でいろいろと考えながら、そういうものをまちづくりの魅力の中につくっているというのが私の考え方です。

**質問者 4** ありがとうございます。金沢と野々市は別に反発する必要はないのです。要するに、「金沢ではこうだったよ」という例をもってうんぬんというのは野々市らしくないと思うのです。野々市らしさというところは、私はそういうところに一つあるのではないかと考えて提起してみたのです。

**質問者 6** 野々市らしさというよりも、石川郡です。私は野々市が押野、富奥、郷地区と合併して初めての小学校の卒業生です。それまで、中学校へ入ったの軍隊や、地域の関係のものは石川郡のくくりで育ってきたものですから、その地域を守って大事にしたい。一緒に卒業した仲間の連中もそうだと思います。あくまでも石川郡で育ったというような思いでいます。



---

**松下** ありがとうございます。野々市らしさということで議論の絶えないところですが、だんだんお時間が迫ってきております。今までのお話を聞いてご提言、ご提案のようなものをいただけるといいと思います。

**質問者 7** 私は第 2 分科会に出たのですが、内容に違和感があって、発言する機会がなかったので、ここで発言します。

三つの分科会の方々の発表等を聞かせていただいて、共通するところでコミュニケーションということがあったと思います。例えば、今日こういう非常に有意義な会があった。ここに出ていらっしゃる方は、いろいろ議論はしているけれども、良かったと恐らく思っているけれども、これがこのまま市当局の努力によって、継続して行ってほしいと誰しも思っているのですが、残念なことに、ここに来ていらっしゃる市民の方が、このことをどれだけ共有できるかということだろうと思うのです。例えば自分の行動でいうと、町内会があるわけです。いろいろな行事をやるけれども、なかなかたくさんの方に参画していただけない。それは、参加して楽しかったということが、不参加だった方々が、次に「じゃ、出てみよう」という方向にコミュニケーションがうまく取れていないということだ思うのです。

午前中のお話の中で、野々市のホームページが非常に良くできている、第一次総合計画の冊子が非常に良くできているというのは、ここにいらっしゃる方々は関心を持っているからホームページを見にいくでしょうし、そういう冊子も関心を持って目にするでしょう。けれども、残念ながら 9 割方の市民の方はそういうことに積極的に関心を持っていただけていない。これが偽らざるところだと思うのです。そういう大半の方々に、どうやってこういう有意義な会があったということを伝えるか。どれだけうまく次につながるようにコミュニケーションしていくかが非常に大事だろうと思います。自分自身も、これから帰って夕方からの飲み会で、その方たちに「じゃあ次の機会、あんたたち、出ようよ」と口に出せるかは自信がないのですが、そういったような輪を市当局の方々が努力していただければと思います。

どれだけ底辺が広がるかでおのずとまちづくりはできてくるのではないかと思っているのですが、その手法、手段、システムについては残念ながら知識不足なので、大学の先生方や市当局の方に知恵を出していただければ、第一線の町内会単位の行動に少し広がりを持つのではないかと思います。

**松下** ありがとうございます。いかにコミュニケーションを活性化していくか、いかに多くの市民の方をそういう意識に高めていくか。その辺が大事なポイントで、それを何とか活性化する仕組みをつくっていききたいということだと思います。その辺も含めて、今後の大学と地域の連携について、パネリストの方々からひと言ずついただいて終わりにしたいと思います。

**安嶋** 市民に広げていくという話は私も同感です。ここに来ていない人がたくさんいるわけで、そういう人たちにいかに伝えていくか。ただ、これについては大学や行政が考えるべきではなく、一人一人が考えて行動すべきだと思います。私は今日帰ったら、まず自分の家族に説明し、自分の友人たちにも説明し、少しずつでも輪を広げていければいいと考えています。これは大学の立場ではなく、住民の立場としてやっていきたいと思っています。

---

**帆苺** 私の会では、愛知の方から新しく越してこられたという方が、祭りを通してまちを知るのが一番身近な思いがすると言われ、野々市にはどんなことがあるのですかと聞かれたので、椿まつりとじょんからまつり、あとは各地にあるお祭りを説明させていただきました。かつては向こう三軒両隣という言葉もありましたが、地域との結び付きがどれだけ親密に取れるかでしょう。

それから、車社会の最初のアメリカで、アメリカのお母さんの投書の中に、「歩道のないまちには子どもが育たない」というのがありました。これは裏を返せば、子どもを車に乗せて走りまわっている親の下では子どもは健全に育たないということです。かつては近所の子どもが悪さをすると、近所のお父さん、お母さんがしかってくれましたが、そういう社会は今ほとんど消えてしまっています。逆に、人に迷惑をかけなければ、何をやってもいい、私の勝手でしょうという、利己的な生活が非常に増えてしまった。アパートやマンションに住んでいる人は全く分からないというような地域のコミュニケーションになっているのではないかと思います。

かつて金沢市がコミュニケーションを育てるために、御輿を作ったら補助金を出すということがありましたが、三軒両隣、町内会から始まって関係を密にしていく社会をつくるのが、その地域に対する関心を持ってもらうために一番いい方法ではないかと思います。子どもの壁新聞のコンクールがありますが、あれは各町内別に壁新聞を子どもたちが作っているわけです。こういうことから始めて、地道にやるより方法はないのではないかと日ごろ考えています。一挙に素晴らしいことはできないと思いますので、まず一步一步着実に足下から固めることが大切ではないかと思っています。

**大友** 分科会でも申し上げましたし、今朝のお話でも多分申し上げたと思うのですが、巻き込む仕組みづくりをどう考えていくかが非常に大事だと思っています。その際には巻き込む側の理屈ではなく、巻き込みたい側の理屈、巻き込まれる人がどうなのかということをとくさん考えていただきたいと思っています。巻き込む側からするといろいろな活動をしてきて、いろいろな思いがあって分かっている。でも巻き込まれる人は何がしたいのか、どんなことを求められているのか分からない。その分からないところに踏み込んでお話を聞きに来ただけけれども、やってみたら1回目では面白くなかった。2回、3回やれば面白いのが分かると言われても、1回目で分からないから次は来ないということがあるわけです。

私の体験から言うと、私は9年前に金沢に来まして、それまではこちらの地域には全くもご縁もゆかりもなく、その後の能登半島などに入っていました。私の本来の専門は法学で、ブランディングとか地域活性化というのは実は専門ではありません。ですから地元の人に嫌がられても、どんなことがあってもそこに行って論文を書けば元が取れるからいいやというモチベーションではなく、笑顔で迎え入れられないと非常に悲しく寂しい思いになります。

皆さん、いい人なのですが、1回目、2回目は非常に硬い顔のことがよくあります。私はできるだけとけ込みたい、理解していただきたいと思ってしつこく行く方ですが、普通の方は途中で萎えてしまうのだろうと感じながら活動してきました。そういうようなことを普段から皆さんも考えながら、できるだけ新しい方には優しく、なじんだら厳しくということをしていくような仕組みづくりをとくさん考えられたらよろしいのではないかと思います。具体的なことはできるだけこれからまた一緒にやる中で見つけていければと思っています。

---

**佐川** 二つのことを言わせていただきます。一つは最初に安嶋先生が言われたことと同じです。特別な特効薬、方法があるわけではありません。水の話がされました。水滴が一つ、皆さま方が一つずつの水滴です。熱いアスファルトに落ちれば一瞬のうちに乾いて終わりです。これが大変むなしいということなのだと思います。そのためにはたくさん雨がもっと降らないと、水たまりもできません。やはりもっと話をするということを市民としてやらなければいけないのだろうと思います。

今回私たち3名は社会科学の教員です。新商品を提案して、「これでどうですか」という出来上がったものを皆さんに提供するような専門ではありません。むしろその方法、どういうふうにしたらこういう問題を解決できるのだろうか、あるいはこういう問題を整理して考えることができるのだろうかという教員です。ですので、皆さんとお付き合いをするためには、例えばもっと呼んでいただく、あるいはそういうことが起これば、私たちがこれからお付き合いができるのではないかと考えています。

私は大学へ戻れば、野々市ではこうだったという話を、これから学生たちにし始めます。また、ここへ来て、もっとこう変わったというような話ができるようになったらいいと思います。ぜひ大学に向けてもボールを投げてほしいと思います。

**松本** 私の提案は簡単です。思いを形にということです。思いがあるならば、周りに発信をしましょう、行動しましょう。行動、発信していると、空振りもあるかもしれませんが、共感する人、一緒にやってみようという人が増えてくると思うのです。全く増えてこないならば、それはやはり意味のないということなのでしょうが、多分そんなことはないです。執念深く自分1人でも投げずに、うまずたゆまずというのが事を成す土台なのでしょう。これは古今東西、そういうことだと思います。まず思いがあるならば発信しましょう。行動しましょう。

**松下** ありがとうございます。もうお時間が来てしましまして、申し訳ございません。私の進行の不手際もごさいます。今お話がありましたとおり、今回、こういった形でタウン・ミーティングをさせていただきました。これはあくまでもきっかけづくりでございます。これから具体的な仕組みや具体的なもっと活動がここの場でいろいろ皆さんと一緒にできていければと思っています。今日は5名のパネリストの方、どうもありがとうございました。

---

## 閉会挨拶

金沢大学地域連携推進センター 副センター長

浅野 秀重

---

**司会** 長時間にわたり、野々市市のこれからをお考えいただきありがとうございました。最後に金沢大学地域連携推進センターの浅野秀重副センター長から閉会のごあいさつを申し上げます。

**浅野** 先ほど事務の皆さんと確認すると、この金沢大学タウン・ミーティング in 野々市の参加者は150人です。本当にありがたく思っております。

先ほど帆苺さんから野々市の市民憲章の、二つ目のお話がありましたが、この市民憲章の中で五つの像が示されています。その具現化という形で総合計画が策定されているわけです。これは協働によるまちづくりが基本となっているわけですが、このまちづくりは、いいものを保存しようということが基本の一つとして挙げられています。いいものとは自然や歴史環境、景観、祭りなどです。では悪しきものはどうするか。必要な規制を加えよう、必要な直しを加えようということです。悪しきもの以外に持てるものは何なのか。それがこのテーマに挙げられている資源かと思えます。この資源も単なる物的な資源だけではなくて、ここにいらっしゃる皆さま方や、市民の皆さま一人ひとりが大事な人的資源であるわけです。そうした資源を見出すことも必要だろう。良きものは分かった。悪しきものも分かった。持てるものも分かった。では必要なものは何だろうといったときに、いいものや良くないものや持てるものや必要なものを分かるための学びだろうと思えます。人育てという話もありましたが、その学びを通じて地域の価値を発見したり、まずい点は何なのかというようなこと。これはもっと伸ばすべきなのだろうかということが分かるのではないかという気がするのです。市民が主役、つまり主役たる人育て、自分育てというものは重要です。その意味でも学びを欠くことはできないという思いでおります。

その学びですけれども、われわれは知ろうとしなければならぬ。つまり知ろうとしなければ学ぼうとなかなかしない。知るための学び。そして、その学んだことを生かして、何らかの活動に取り組む。ボランティア活動、まちづくり活動に生かす。つまり実践するための学び。そして1人が100歩先を行ってしまうという歩き方もいいけれども、100人で、遅いけれども1歩歩む。そういうようなまちづくりも大事ではないかという気がするのです。

今日このホールで行ったこのタウン・ミーティングは、ある意味では大学へのボールを投げたというようにとらえ方をすれば、単に市民の皆さんと行政の間でのやり取りだけでなく、市民の皆さん、また、行政の機関としての野々市さんと金沢大学との間でのボールのやり取りとも言えると思えます。私たちは学びのことを、励まし合い、学び合い、高め合いと言ったりするのですが、今日のタウン・ミーティングが、野々市市の皆さん、そして野々市市の行政の方々と金沢大学との間での学び合い、高め合い、支え合いというような一つのきっかけになる、そうした連携の機会となるような場としたいと思っています。そのつもりでこれからも投げ掛けていただければ、積極的に手をつなぎ、協働し合いながらいい野々市市への支援、応援、そしてまた大学のいい研究や教育に生かしたり、社会貢献の機会になればと思っております。

---

以上で閉会の言葉とさせていただきます。

**司会** これにて金沢大学タウン・ミーティング in 野々市を終了させていただきます。本日のご意見、ご提案を生かす形で、次の一歩につなげ、野々市市がより魅力のある住み続けたいまちになるよう、皆さま、応援をよろしくお願いいたします。またこのタウン・ミーティングを機に、野々市市と金沢大学の連携が進みますよう、関係の皆さまに強くお願いしたいと思います。

本日は日曜日の大切なお時間をタウン・ミーティングに充てていただき、本当にありがとうございました。

## アンケートの集計結果

アンケートは35名の皆様に回答いただきました。これを下図のようにA～Jの10グループに分け、各グループごとの御意見を掲載いたします。

金沢大学タウン・ミーティングin野々市 参加者アンケート					
回答者の性別、年齢、市内・市外の別					
	年齢	市内	市外	不明	計
男	～19				0
	20～29	A 3	G 1		4
	30～39	1	1		2
	40～49	B 1	H 1		1
	50～59	3	2		5
	60～69	C 5	I 1		6
	70～79	3			3
	不明				0
小計		16	5		21
女	～19	D 4			0
	20～29				4
	30～39				0
	40～49	E 1			1
	50～59	3			3
	60～69	F 5			5
	70～79				0
	不明			J 1	1
小計		13		1	14
合計		29	5	1	35

◆A 市内・男性・39歳以下

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・野々市市のまちづくりの考え方や在り方を様々な視点で考えることができた。野々市市民として考えなければいけないことがあると思った。

・様々な職業団体の人が互いの意見を交換し、まちづくりに関する認識を深め、改めて見直す良い機会になった。

・特に問題はなかった。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・継続開催を考えてほしい。

・野々市市の事業へのアドバイザーとして、今後も協力をお願いしたい。

・継続した取組をお願いしたい。

〈野々市市へのご意見〉

・都市化とまちづくりの在り方についても政策を考えてほしい。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身が取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・市民として野々市市の文化や交通などに関して研究し、地域に還元していきたい。

・大学に存在するイメージとしての知力や創造力を行政及び地域が具体的な形でまちづくりに活かしていくという連携が望まれる。

・良い意味で成熟した市民に共になっていきたい。甘えるだけでなく、対等に行政と向き合える市民へと、キャッチボールがうまくできるように。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望めますか。自由にお書きください。

・市民との幅広い意見交換ができるようにしてほしい。また、政策面でも連携し、効果的なまちづくりが実現できるようにしてほしい。

・専門的な助言とコミュニティという範囲の外からの客観的な意見を地域課題の解決に向けてほしい。学生には、さまざまな活動をどんどん市内で行ってほしい。

◆B 市内・男性・40～59歳

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

- ・いい機会、きっかけであった。問題提起された課題の解決を情報として見える場を作ってほしい。
- ・野々市市も金沢市や内灘町のように、スポーツに関する統計データがあればいいと思った。
- ・趣旨説明が分かりにくかった。
- ・話題提供の説明が非常に分かりやすかった。市と市民の協働作業を行うための課題解決に向けたヒントが多数含まれていると思った。プレゼンのパワーポイント資料を配布してほしい。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

＜金沢大学へのご意見＞

- ・地域資源の発見は自分たちで見つけにくいもの。ただ、地域開発プロデューサーの成果だけでは根付かない。引き続きこのような機会をもってほしい。
- ・一つの試案として、「高級野菜のまち」など、可能性のあるものを市外からの目線で示してほしい。

＜野々市市へのご意見＞

- ・地域資源は有形無形の財産両面があると思われるが、ブランド化した商品の成功だけが結果ではなく、教育の現場などに地域の人資源として、〇〇マイスターなど、生きた技術を伝える人の育成を地道にやしてほしい。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身が取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

- ・子どもたちへの文化・歴史・伝統工芸を伝える場を提供するお手伝いをしたい。記憶に残る町の表情、思い出を残してあげたい。
- ・現代の住宅は、長くても50年くらいで建て替えが必要。コンクリート造りも同様。昔は、地域に住む人がに代々住み続けたが、近年は若い人など1代で市外に出ていく。そう考えると、10年、20年の単位とは別に、50年後を見据えた「まちづくり構想」により、市政の方向性を示す必要があるように感じる。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。

- ・野々市市の課題を研究テーマにして、解決してほしい。



◆C 市内・男性・60歳以上

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

- ・話題提供は、考えることが多くて有意義であった。分科会は、それぞれの意見がまちまちで難しかった。
- ・すべてのテーマに参加したく、テーマごとの開催を考慮してほしい。
- ・話題提供の資料をダウンロードできる形で公開してほしい。
- ・話題提供者(大学教員)のプロフィールが事前にわかっていたらよかった。
- ・もっとこういう機会をたくさん作ってほしい。
- ・当日の10時から15時までの賞味4時間をテーマに専念して聞いたり考えたりすることができる人、最後まで参加できた人が100人近くもいたことに感心した。
- ・問題の提起が悪かった。基本的な考え方を示した上で、参加者の考えを求める進行の方が的確な結果が出ると思う。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

<金沢大学へのご意見>

- ・分科会方式では、初歩的な意見が8割くらいあり、実りある討論にはならない。モデルでもいいから、具体的ケースで意見交換した方がいいのでは。
- ・現在までの行政の考えをまとめて示してほしい。

<野々市市へのご意見>

- ・各分野のテーマ等に関して、石川県立大学や金沢工業大学と今以上に連携を図り、もっと前面に出てもらう取組が重要ではないか。
- ・「市民協働のまちづくり市民会議」が設立されると聞かすが、地区(町内会あるいは公民館単位)での「まちづくり協議」の場があれば、より地域に定着するのではないかと。名称は、「地域福祉研究会」でいかがか。
- ・行政と市民間のコミュニケーションが一方通行あるいは発信しっぱなしの面があるのでは。双方向で、かつ、密なコミュニケーションが可能な環境・システム作りが必要ではないか。
- ・タウン・ミーティング実施が主か、協働に向かわせるのが主か、不明確。こうしてほしい、こうしたいという意見ばかりが目立ったが、それぞれの思いを聞くばかりの進行に工夫してほしい。
- ・イベントをこなして「ハイそれまで」がこれまでの例。その結果を何らかの形で周知させることを望む。
- ・住民の意見を聞いていたら、市で計画されている青写真の基本的な考えをしらない人がたくさんいる。もっと知らしてほしい。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身が取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

- ・野々市市のアピールを行ってほしい。
- ・金沢のベッドタウン化はある意味やむを得ないと考えるが、仕事とプライベートのon-offの切り替えを考えたとき、「offの時間の快適さ」で「やっぱり仕事は金沢でも、住生活は野々市だ」と言える地域づくりをしたい。
- ・シルバー人材の派遣でエコセンターに居るが、古本(特に専門書)が多く入ってきている。貴重な資源を里まちづくりにつなげるため、「古本図書館」を本町あたりの古民家で作ったらどうか。
- ・安全、安心のまちづくり。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。

- ・住民サポートやスポーツ交流等の連携を望む。
- ・地区単位(町内会、公民館単位など)の行事(勉強会など)への講師派遣が可能なら、依頼したい。
- ・「大学⇄市」をもっと踏み込んで「大学⇄町内」、「大学⇄地域サークル」といった、よりミクロな形の連携ができればいい。
- ・広い角度からの知見の提示は参考になるが、自分の実践と結びつけるのは難しい。
- ・もっと交流のある対策をしてほしい。

## ◆D 市内・女性・39歳以下

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・テーマ設定は、市民にとって身近に考えられるテーマで良かった。もっといろいろな参加者の「生」の声を聞きたいと思った。

・関心のある、とても興味深いテーマだった。特に午前中の話題提供は、とても参考になり、勉強になった。話も分かりやすく、午後の分科会につながったと思う。

・分科会の時間がたっぷりあって良かった。参加した人みんなの意見を聞くには、もっと少人数がよかった。今後、市民会議を開くときに、いきなり「まちづくりについて話し合おう」と言っても、なかなか参加しづらい人もいると思うので、例えば子育て世代が興味のあるイベントの中で「まちづくり」について触れるなど、いろいろな場面で少しずつ意見を引き出せたらいいと思う。

・分科会では、はじめのように発言したらいいのかわからなかった。もう少し、進め方に指示があってもよかったのでは。時間配分はちょうど良かった。話題提供や全体発表など、飽きることなく話を聞くことができた。楽しかった。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

<金沢大学へのご意見>

・この会での意見を学生にどのように反映させるのだろうか。私たち市民に問題を提起するだけなのだろうか。

<野々市市へのご意見>

・他の自治体の協働について学びつつ、「野々市流」の市民との関わりが作れればいい。

・室温が少し低かった。住民となって間もない人が実際に体験できて思い出になるイベントを知りたいと話していた人がいたので、市の職員が地元行事に盛んに参加して、担当部署でなくとも、それを広く勧められるようになってほしい。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身が取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・自分自身が野々市にもっと知ること。特に学生など若い人は学ぶべきでは。

・野々市らしさとはなにか、どういうふうにコミュニケーションをとっていくか、などについて一緒に考えていきたいと思う。

・安嶋先生が話されたセンターの機能を市に持たせたい。コミカレにしても、里まち倶楽部にしても、公報とHP以外に情報発信する方法を検討していきたい。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。

・金沢工業大学や石川県立大学だけではなく、金沢大学との連携がもっと増えればと感じる。金沢大学のまちづくりインターンシップの受け皿として、ぜひ野々市市も加わってほしい。

・「大学⇒地域」としては、知識の提供、アドバイザーとしての会議への参加、さまざまな地域出身の学生からいろいろな意見・視点・アイデアをもらう。  
「地域⇒大学」としては、地域の歴史や特性を紹介する、交流の場を持つ。

・市民会議のアドバイザーとして大学教員に協力してほしい。学生の研究テーマとして、「まちづくり」を取り上げてもらいたい。学生ボランティアと連携を図れたらいい。

・大学生がどのようなことができるのかよく知らないので、市や市民に向けたシーズ発表の場を多く設けてほしい。隠れた野々市市の観光地の見せ方、使い方を一緒に考えてほしい。

## ◆E 市内・女性・40～59歳

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・市の大きな課題がテーマに設定されていたのは、大変良かった。また、話題提供者が市外から見た客観的な話もされたので良かった。

・話題提供がとても聞きやすく、勉強になった。特に、全国住みやすさランキングで2位になった基準が理解・納得できた。

・話題提供の方々の専門(経営、法学、スポーツ)のバランスが良かった。

・大学の先生方のお話は、とても分かりやすく、時間もピッタリで、さすが。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

<金沢大学へのご意見>

・衣・食・住を基本として考えると、さまざまなことに結びつきそう。

・野々市市は、平均年齢38歳と若い市で、高齢化率も県内で一番低くなっているが、今後10年間で高齢者が急増することが予想されている。そして、その多くが一人暮らしや高齢者世帯である。介護施設は、それなりに充実しているが、高齢者が地域で暮らし続けることができる仕組みづくりの指針を提示してほしい。上記に加え、高齢になっての転入者が多いのも、野々市の特徴だと思う。

<野々市市へのご意見>

・白山が見える図書館、自然を身近に感じるあったかいコミュニケーションのとれる施設を希望。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身が取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・自然にあいさつ、声掛けができるまち。

・町内のゴミ問題への取り組み。

・市内の高齢者施設でケアマネジャーをしている。介護保険サービスのみで生活を支えるのではなく、困っている事例を通して、市に発信していきたい。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。

・野々市特産品をブランド化する時である。農業の振興について、石川県立大学との連携を。市内小中学校における理系教育の推進について、金沢工業大学との連携を。

・知的サポートを。

◆F 市内・女性・60歳以上

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・野々市の特徴がわかって良かった。

・テーマの終了時に、5～10分の休憩時間をとった方が良かったのでは。

・テーマ(1)は、具体的にとても分かりやすかった。テーマ(2)普段、最も「野々市」について考えていることを指摘された。テーマ(3)20～25年後の人口を考えると、少子高齢化へとまっしぐらである。

・話題提供は、我々にも分かりやすかった。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・金沢大学の学生にも野々市市に住んでもらう政策をして、意見をいただきたい。

・先生方の話がとても分かりやすかった。また、このようなミーティングを開いてほしい。野々市市へも要望する。

・自分は、町内では週1回グランドゴルフをしている。椿荘で手伝いをしている。夫婦でジムに行き、身体を動かしている。町内の見守り隊をしている。食事に気を付けている。しかし、コレステロールが高い。今年もがんばりたい。

〈野々市市へのご意見〉

・今回のポイントを課題に取り組んでいただきたい。

・このような企画等への参加する人々がかたよらないようにお願いしたい。

・美しい街を維持していくために、高層の建築物を作らないなどの規制が必要。

・参加者は男性が大変多いように思える。女性の参加を求める。参加しにくい「何か」があるのではないかと。PR不足。

・色々な地域に気を配ってほしい。

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・文化的サークルにも応援してほしい。

・高齢になり車の運転ができなくなったとき、現在の高岡市のような市電みたいなものがあれば良いなと思う。また、一人暮らしの方が急激に増えている。なるべく施設に入らなくてよいように、食生活、入浴などの面で支援が充実できるシステムがあれば、税の負担を減らせるのではないかと考える。

・私は、健康推進委員をさせてもらっている。20年後を考えると、健康で住み良い環境を考えていきたい。健康な町民を増やしたい。

・町の行事には、できるだけ参加していきたい。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望めますか。自由にお書きください。

・1回だけで終わらせないでほしい。

・昨年、町内のバスで石川県立大学を訪問して、びっくりし、感激した。また、福田農産にも行き、有機栽培のトマト・トウモロコン・きゅうり、花づくりを見学させてもらった。とても良かった。

#### ◆G 市外・男性・39歳以下

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・今日あったことをできる限り、来られなかった人を含め、市民に伝えることが求められる。

・テーマの設定は、すべて市民が主役となるものであり、自分たちのこととして話し合える良い機会だったのではないかと感じた。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・行政と地域をつなぐ(行政の言葉を分かりやすく翻訳する)役割を担ってほしい。行政の言葉より先生の話の方が分かりやすいと思う。

〈野々海市へのご意見〉

・市民協働のまちづくりは、これからの行政が進めていくべきことと考えている。まず、協働の考え方を市民と共有できるかどうかが鍵になるのではないかと考える。

③ 野々海市のまちづくりに関して、ご自身取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・スポーツを通してのまちづくり。それは、一人一人の健康を増進することもそうだが、地域住民との関係が希薄になりつつある現代において、分かりやすいコミュニケーションの手段となり得るのではないかと考えるからである。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望めますか。自由にお書きください。

・互いにオープンの関係になることではないか。互いに情報を与えあい、コミュニケーションをとる機会が生まれればいいのではないか。実際、今日のミーティングには何人の学生が来たのだろうか。野々海市において学生の人口に占める割合は大きい。ある意味で、「見えない若者」である学生を「見える学生」にする活動があればいいのではないかと考える。

#### ◆H 市外・男性・40～59歳

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・運営に特に問題はない。スタッフもよく働いていたと思う。富山市から参加した。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・分科会はテーマ1に参加した。金沢大学の取り組み事例を紹介してもらい、それをもとに野々海市はどうしていか・・・という議論があったらいいと感じた。

〈野々海市へのご意見〉

・分科会1で野々海市職員の方がボランティアや施設のことをお話しされたが、役人的な考えや視点が強すぎると感じた。「市民が主役」なので、市民の視点で業務に従事してほしい。

③ 野々海市のまちづくりに関して、ご自身取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

・自分も富山市の行政の立場で地域活性化の官業業務を行っているので、失敗例を含めてお話しすることができる。私が野々海市市民であれば、子どもたちが主役の活動(生きものマップづくりなど)に取り組みたいと思う。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望めますか。自由にお書きください。

・市民の中で、特に子どもと老人は地域の財産だと思うので、野々海市の大学では、ぜひ市民たちを主人公にした活動を実施してほしいと思う。

◆I 市外・男性・60歳以上

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・住民の方がまず地域資源に気づき、発見ができれば、その後の流れはある程度イメージできる大学関係者や活動家がいる。

〈野々市市へのご意見〉

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。

・大学と行政の距離が遠い。その距離を狭めるコーディネートが必要。

◆J 区分不明

① テーマの設定、プログラムの流れ、時間配分、その他運営等についてのご意見、又は参加されてのご感想があれば、自由にお書きください。

・話題提供はどれも聴きやすかった。特に、テーマ1の内容の「協働」については、とても分かりやすかった。私見の提案も、自治体と市内の様々な業種との連携を示していて、大変参考になった。今後の分科会の予告もあり、皆さんが参加しやすかったのではないかな。

② 本日発言できなかったことで、伝えておきたいご意見があれば、自由にお書きください。

〈金沢大学へのご意見〉

・話題提供の部分を聴いただけなのだが、「金沢大学」の顔がほとんど見えなかった。

〈野々市市へのご意見〉

③ 野々市市のまちづくりに関して、ご自身取り組みたいことはありますか。それはどんなことですか。

④ 地域と大学との間で、どのような連携が望まれますか。自由にお書きください。